

# 教会と社会の未来を 切り拓くために

東京基督教大学大学院の理念と概要

東京基督教大学

T o k y o  
C h r i s t i a n  
U n i v e r s i t y



## ごあいさつ

理事長 赤江弘之

この度、日本初の福音主義に立つ神学大学院「東京基督教大学大学院神学研究科（修士課程）」が開設され、去る4月6日、第1期生として17名（18名定員）の入学生を迎えて入学式が行われました。長年月にわたる先人たちの多大なご労苦、そして諸教会の祈りとご支援の賜物であります。心より厚く御礼申し上げます。

3月の学園卒業式直前に学園理事・評議員はじめ、諸支援団体、卒業生の諸先生方、大学教職員一同が学園食堂で一堂に会し、「大学院開設祝賀会」をいたしました。主への感謝をささげつつ、3人の来賓代表の祝辞に大いに励まされました。

この日の卒業式のなかで、大学入学式に併せて、「東京基督神学校閉校式」をいたしました。62年6カ月の幕は閉じられましたが、1980年に三神学校が合同し、それぞれの神学校が培ってきた、宗教改革の神学と精神を、大学院の教会教職課程において継承するというビジョンがここに成就したのです。大学院設置にあたり、東京基督神学校の山口陽一校長が研究科委員長（教会教職責任者）となられ、その他数人の神学校教師たちも、大学で教鞭を執って働きを継続してくださいます。

また本大学は、折良く大学院開設を控えた3月に、大学基準協会による認証再評価において大学基準に適合しているとの認定を受けたことをご報告いたします。これまでの皆様のお祈りに感謝致しつつ、今後も本学が公的な高等教育機関として、教会と社会に対する責任を継続的に果たしていきたいと願っております。

さて、本冊子刊行の趣旨を申し上げて、本文における私の責任を果たしたいと思います。私は、一地域教会の牧師でありつつ、本学園の理事長職を拝命して以来8年の歳月が過ぎました。この間、本学園の存在意義を充分にお伝えできていないという負い目を抱き続けてまいりました。今回、待望の大学院設置認可・開設という、主の恵みによる快挙を機に、本学の存在意義を、改めて教会と一般社会に向けて表すべきであると、強く感じております。それには、大学院設置趣意書「東京基督教大学に大学院神学研究科を設置する趣旨等」（本書31頁から）に勝るものはありません。よってここに、本冊子を上梓いたします。

本冊子により、東京基督教大学・大学院に関するご理解をさらに深めていただき、ますます諸教派・諸団体の教会の信頼を得て、教会指導者と信徒リーダーの育成にご活用いただきたいと願っております。本学が、日本宣教と世界宣教に大きく寄与し、神の栄光を現すものとなりますよう、引き続きお祈りとご支援をお願いいたします。（2012年4月）

## 目次

### 教会と社会の未来を切り拓くために 東京基督教大学大学院の理念と概要

ごあいさつ	1
大学院神学研究科設置とそのヴィジョン	3
大学院のめざす教会教職像	6
教会教職課程の概要	9
神学研究科の教授陣	12
授業科目の紹介	14
大学院設置趣意書を読むにあたって	28
趣意書 「東京基督教大学に大学院神学研究科を設置する趣旨等」	31

この冊子は、2012年4月に開設された東京基督教大学大学院神学研究科の設置を文部科学省に申請した際に提出した設置趣意書「東京基督教大学に大学院神学研究科を設置する趣旨等」の本文（本書31頁以降）と、その概要を解説する文章をまとめたものです。

趣意書本文中に記された「参考資料」は、設置申請の際に添付資料として提出したのですが、本冊子では割愛しました。

教員・カリキュラム等は、趣意書に記載された開設時のものです。

# 大学院神学研究科設置とそのヴィジョン

学長 倉沢正則

2011年10月24日、2年にわたり具体的な準備を進めてきた東京基督教大学（TCU）大学院神学研究科の設置が文部科学省から認可されました。プロテスタント福音主義に立つ大学院としては日本で初めてのことです。神学研究科は、教会教職者（牧師・伝道師・宣教師等）の養成を主眼としつつ、神学研究者・教育者を含めた高度専門職業人養成の修士課程です。小規模大学ではありますが、その志は高く、その使命は大きいと考えています。これまで本学と専修学校である東京基督神学校（TCTS）で行ってきた教会教職者養成を本学に一本化して、大学院までの「教会教職課程」とし、21世紀の教会と社会を指導する教会教職者を養成することになりました。

## これまでの道のり

本学の法人である東京キリスト教学園（TCI）は、1979年（実質的には1980年）に3つの神学校（共立女子聖書学院、東京キリスト教短期大学、日本基督神学校）の合同を果たし、福音主義諸教会の神学教育の歴史に大きな一歩を踏み出しました。三校同時に策定された「建学の精神（3校協力による新校の教育理念）」（1979年）の「(2)福音主義」の項には、「新校は聖書を誤りのない神の言葉と信じ、かつ信仰と生活の唯一の規範とする福音主義に立ち、**教職者および奉仕者を養成することを目標とする神学教育機関**である。新校はこの立場に則り、信仰基準を制定し、信仰的に深く幅の広い教育内容を整備し、正統的な神学に基礎づけられた有能な人材を福音主義諸教会に送り出すことを目指す」とあります。また「(3)超教派神学教育」の項には、「新校は3校に分散されていた**賜物をここに結集することによって**生じるより大きな可能性を活用し、教派を超えて日本内外の諸教会への奉仕と発展に寄与することを期待する」（ゴシックはいずれも筆者）と記されています。要約すれば、三校合同の理念は3つの学校が1つの「新校」となることを目指すものであり、また、教職者のみでなく信徒奉仕者をも養成することを目標にしていました。

先人たちは、数多くの小規模校に分かれている神学教育機関が世界宣教のために大同団結してその賜物を結集し、21世紀の日本とアジアと世界に果敢に出て行く宣教の働き人を育成するという志をもって合同を実現し、10年後に福音主義初の4年制神学大学の設立を果たしました。さらに先人たちは、その神学教育を、「私塾」という形態ではなく、すでにもっていた「学校法人」として行うことで、教会のみならず社会から認知

され、社会に影響を与える、世界宣教の働き人を育成しようとなりました。神学教育も教育の公共性をしっかりと自覚し、福音をもって社会変革を担う有為な人物を教会と社会に送り出そうと願ったのです。大学院構想は、こうした4年制神学大学の開学時からの祈りの一つでした。思えば、TCU開学から22年を経て、ようやく当初の「一つの新校」のビジョンが、大学院までを含めたかたちで実現したのです。学園の主の憐れみと導き、先人たちのビジョンとそれを担った人々の忍耐と労苦を忘れてはならないと思います。

## 大学院設置の意義

今回の大学院設置には、以下の5つの意義があります。第一に、学園内に2つ存在した教会教職養成課程を、大学院までの一貫教育として一本化することにより、建学の精神の教育目標の一つである教会教職者養成を、本学のより堅固な支柱として据え直すことができたことです。それにより、かつての三神学校が歴史を通じて培ってきた宗教改革の神学と精神を、大学院までの教会教職課程において継承できるようになりました。第二に、学部で行ってきた教育を土台として幅広い視野をもった教職者養成が可能になったことです。その教育とは、①「信仰と学問の統合」を図るキリスト教世界観にもとづく教養教育（キリスト教リベラル・アーツ教育）、②国際キリスト教学専攻の国際性と異文化理解、③キリスト教福祉学専攻のキリストの「隣人愛」と「奉仕の精神」の実践です。これらが神学専門教育に幅広い視野と深い洞察を与え、グローバル化する社会における異なる他者との協働やコミュニケーションの能力、さらには人の苦悩と痛みに共感できる深い人間理解を培う機会となります。学部の神学基礎教育とともに、国際性と福祉の心が神学専門教育に深みと豊かさを与えることが期待されています。

第三に、教会の福音主義信仰の基盤を強固にし、今日的な課題に対する神学的指針を、教会と社会に向けて発信できる適切な「場」が与えられたことです。大学院としての深い学術性を備えることで、学术界や社会により貢献することができる環境が準備されました。それだけに、今後はその研究知見の成果が問われることとなります。

第四に、世界の教会やキリスト教神学教育機関や高等教育機関との人的・学術的交流がいつそう盛んになることです。キリスト教は歴史的に豊かな国際性を備えていますが、特に今日のグローバル化のなかで、共同の研究やセミナーなどの開催により互いの教会や社会への貢献が期待できます。

第五に、教会教職課程が大学院までの一貫教育となることで、教職員の働きが分散でなく「集中」となり、より効率的に相互の連携がスムーズに働くようになります。限られ

た陣容で効果的な働きを可能にする大学院設置は、法人の経営にとって大きなプラスとなるばかりか、教員の後継者養成にも道筋をつけ、本学の一層の前途を開くことができます。

## 大学院設置のヴィジョン

私たちは、大学院設置に際して以下のようなヴィジョンをもっています。

日本社会の高齢化に比例して、教会の高齢化と後継者不足は喫緊の祈りの課題です。教会学校生徒の減少と中高生の教会離れが加速している現状があります。青少年への働きとその指導者育成、また、複雑化し人のつながりが疎遠となりつつある現代社会にあって、キリストを絆とする新しいコミュニティ形成と地域社会への取り組みに指導的な役割を果たす教会教職者の育成は、キリストにある神の国の進展のために教会と神学教育機関が協働で取り組むべき事柄です。これからの教会教職者には、専門的な聖書的・神学的見識とともに、人格的な成熟と、異なる他者と協働する能力などの資質がますます求められるようになります。大学院設置のヴィジョンの第一は、こうした必要に応える教職者を数多く輩出できるよう、大学院までの教会教職養成教育に全力をあげて取り組むことです。

第二には、各地域にある神学教育機関との連携を深めることです。人的・学術的交流を行い、互いの賜物と特性を生かして、教会教職者養成の質を高め合い、諸教会の後継者養成に資するものでありたいと願っています。

第三に、日本で福音主義に立つ唯一の神学大学院として、アジアの福音主義神学教育機関とのネットワークをさらに広げ、アジア全体の神学教育機関の質的向上のための学術的・人的な貢献をはかります。アジアのみならず世界の神学教育機関との交流をさらに広げて行くことは、本学の責任でもあると自覚しています。

第四に、本学の次世代教員の養成のために、できるだけ早い時期に「大学院博士課程」の設置をはかりたいと考えています。

「キリストがすべて」を大学のモットーとする本学が、キリスト教世界観にもとづく教養を身につけた神学専門人である教会教職者を諸教会に送り出す神学教育機関となり、キリストの御国の進展とその御名の栄光を顕わすことを願ってやみません。

# 大学院をめざす教会教職像

神学研究科委員長 山口陽一

東京基督教大学大学院（神学研究科）は、教会教職者の養成を主眼とし、従来の東京キリスト教学園における教会教職養成の継続と発展を期して設立されました。この間、理事会と各校教授会および大学院開設準備室では、評議員会をはじめ各支援団体への説明や意見交換を重ねつつ、今日の教会と社会の必要に応え、将来を切り拓くことのできる教会教職者像を思い描いて大学院の設置準備を進めてまいりました。

この冊子は、文部科学省に認可された「東京基督教大学に大学院神学研究科を設置する趣旨等」にもとづいて、大学院をめざす教会教職養成について理解を深めていただくためのものです。ただし、東京基督教大学における教会教職養成は、大学院だけでなく学部から大学院までの教会教職課程で行われます。そこで、ここでは新設の大学院を中心にしつつ、4年間の教会教職課程がめざす教会教職像について説明させていただきます。

## 教会教職課程の全体像

教会教職とは、牧師、伝道師、宣教師、教会主事、神学研究者、神学教師などみことばの職務にあたる者、一方奉仕者とは信徒のリーダーを指しています。これまで東京基督教教学園では神学校と大学の2校において教会教職と信徒リーダーの養成を行ってまいりました。東京基督神学校では教会教職の育成と共に教会音楽の奉仕者育成を行い、東京基督教大学ではキリスト教リベラル・アーツ教育にもとづく人格教育を重視して、牧師をめざす学生たちのために教会教職プログラムを設け、諸教会の期待に応えてまいりました。この度の組織改編では、東京基督神学校神学科と東京基督教大学神学部神学科教会教職プログラムを統合して学部3,4年次の教会教職専攻と神学研究科（大学院）2年、計4年間の教会教職課程を設置し、神学校音楽科は大学の副専攻および専攻科といたしました。ゆえに、これから述べようとする教会教職者像は、たんに大学院だけのものではなく、学部の3年次に始まる教会教職課程の目標としてご理解いただければ幸いです。（「Ⅷ 既設の学部との関係」55頁参照）

## 召命感の確認と献身者教育

神学校と比べ、大学では召命感の確認と献身者教育が弱いと考えられるかもしれません

が、そうではありません。本学においては学生全員がキリストへの献身を表明して入学します。そして3年次において教会教職専攻に進む場合には、本人の教会教職への召命感を確認し、所属教会の推薦を得るという手続きがとられます。他大学の卒業生がこの専攻に編入学する場合も、TCUあるいは他の神学大学および神学校の卒業生が本学大学院に入学しようとする場合も同様です。つまり、本学の教会教職課程は神学校入学と同様の召命感を求めているのです。

大学院には教会教職コース（42単位）と神学研究者・教育者コース（若干名、30単位）があり、3、4年次の教会教職専攻と大学院教会教職コース修了者には修士号とは別に本学による教会教職課程修了の認証がなされます。若干名であります。教会教職専攻以外から大学院に入学し、神学研究者・教育者コースを修了する者があります。この場合にも教会の推薦が求められます。神学研究は教会に仕えるものだからです。（「IX 入学 者選抜の概要」56頁参照）

### 教会実習と全寮制教育

毎週の教会実習や全寮制教育は従前の通りです。大学院では教会実習を教室に持ち帰って検討する実践神学演習を行い、東京基督神学校以上に、教会実習の充実を図っています。神学校における教会インターンは大学院においても継続されるほか、キャンプ伝道、青年伝道、福祉施設でのボランティアや救援活動などへの参加をインターンとして位置づけ、重視いたします。

寮生活も東京基督神学校におけるそれを踏襲しますが、学校の統合と在校年限の1年延長により、これまで以上に寮運営に関わり、コミュニケーションやリーダーシップの訓練を受けることを期待しています。掃除や早天祈祷会などは学生の寮運営委員によって自主的に行われ、3人の寮主事がこれを励ますこともこれまでと同様です。

夏期伝道やスプリングリトリート（修養会）は学生部の指導の下、学生たちが自主的に準備、運営しています。こうしたところにも大学院生を含む教会教職課程生が積極的に関わることとなります。全寮制の生活において、通学や通信で神学を学ぶことでは鍛えられない人格的な訓練を経験することは、今日の教会教職育成においてますます重要度を増していると思われます。牧会をしながら大学院で学ぶケースも増えることが予想されますが、こうした学生や事由ある学生については通学も許可されます。

本学の場合、福音主義の各教派、教団、教会から、また英語で学ぶアジア・アフリカなどからの留学生、日本伝道を志す韓国人留学生、アメリカを中心とした短期留学生が同じ寮で生活していますので、異文化および他者理解において貴重な経験となることが期



待されます。これはグローバル化した社会における牧会伝道に必ずや益することでしょう。

### 正統的神学に立つ実践神学

学部3、4年次の教会教職専攻において、聖書神学、組織神学、歴史神学、実践神学の基礎を履修します。すなわち、ギリシア語、ヘブライ語の文法と講読、組織神学の概論と各論、教会史の概論、説教学や礼拝学などの実践神学までを学ぶことになっています。大学院では、これらをふまえたより総合的かつ実践的な神学研究を行います。聖書学分野では釈義力の強化をめざしています。これは神学校の3年間では時間の不足を覚えていたところです。神学・教会分野では、神学各分野の今日的・実践的統合をめざす演習形式のクラスを多く設けています。たとえば必修科目の「教会とミニストリー」では、今日的な神学の課題を扱うのみならず、キリスト教福祉学の視点を牧師養成に生かして地域に貢献する教会の形成を考えるなど、新たな試みをしようとしています。演習形式で、時には複数の教員が関わって行われるクラスでは、他者との協働的な作業を重視します。これを通して複数教会や信徒を生かす教会のセンスも身につけることをめざします。（「I - 3 人材養成の目指す方向と教育理念」36頁、「IV 教育課程の編成の考え方及び特色」43頁参照）

### 神学研究者・教育者の育成

東京基督神学校は、教会教職育成のための神学校としては学生の研究力向上に力を注ぎ、3年次の卒業論文を重視して来ました。今回の大学院設置はその結実でもあります。今後、大学院では2年をかけて修士論文の作成にあたり、そのための論文指導や相互評価を強化しました。牧師としての広範な能力に加え、専門分野の研究をもって広く教会や社会に貢献することのできる神学者の育成は、神学各部門において重要な課題です。福音主義の信仰に立ち、伝道者のスピリットをもった神学研究者の育成が、この度の大学院設置において日本の教会に対する最大の貢献となるよう、励みたいと思います。

# 教会教職課程の概要

## 21世紀の教会と社会の未来を切り拓く教会教職者の養成のために

東京基督教大学の教会教職課程は、神学部3、4年次の教会教職専攻（専門基礎教育・前期2年間）と大学院神学研究科（専門教育・後期2年間）によって構成される、一貫した4年制の教会教職養成課程です。2011年をもって62年の歴史を閉じた東京基督神学校と東京基督教大学における教会教職養成の賜物を結集した待望の新課程としてスタートしました。

### 大学院 神学研究科 神学専攻

Tokyo Christian University Graduate School of Theology

学位 修士（神学）／ Master of Arts in Theology

定員 入学定員 18名 収容定員 36名

修業年数 2年間

専攻・コースおよび卒業要件単位数

教会教職者コース（42単位）

神学研究者・教育者コース（30単位）若干名

専任教員数 8名（教授7名、准教授1名）

### 教育理念

明確な召命感を持ち、福音主義に立つ正統的な神学・敬虔な生活・深い人間理解・伝道と牧会の情熱と実践力を身につけ、国際的な視野を持って教会と地域に仕える教会教職者を養成します。

### システム

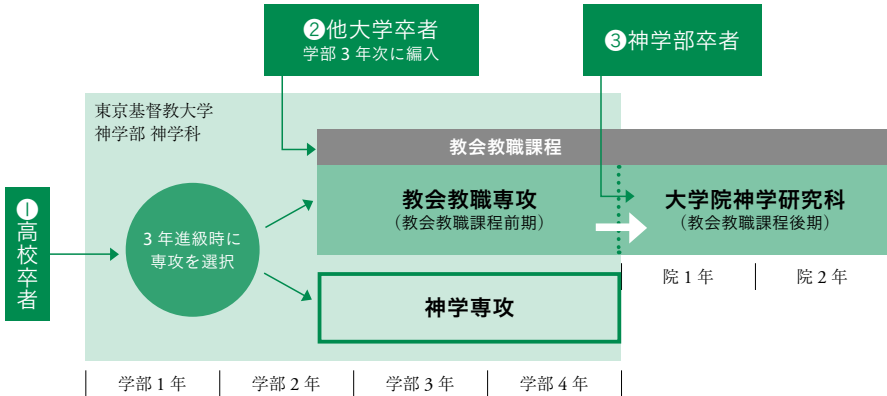
教会教職専攻（専門基礎教育・前期2年間）

神学科3、4年次において神学の専門基礎教育を行います。

大学院修士課程（専門教育・後期2年間）

教会教職者コースと神学研究者・教育者コースがあります。

## 教会教職課程のシステムと入学のパターン



### ①高卒者は6年間で

学部1、2年次は教養科目と神学諸科目からなるコアカリキュラムなどを履修、3年次に教会教職課程へ進級します。

### ②大卒者は3年次に編入

前期・後期合わせて4年間で教会教職課程を履修します。

### ③大学院から2年間

神学部を卒業した方、現役の教会教職者の方は大学院から2年間の学びになります。

## カリキュラム

「聖書学」「神学・教会」の2領域と「研究・演習」

聖書学	神学・教会	研究・演習
旧約・新約聖書緒論 (必修科目)	近現代のプロテスタント神学 (必修科目)	神学研究の基礎 (必修科目)
聖書解釈学 (必修科目)	教会とミニストリー (必修科目)	研究指導 (必修科目)
五書研究	日本キリスト教史	神学総合演習 (必修科目)
預言書研究	宗教多元社会と公共哲学	説教演習
聖文書研究	現代キリスト教の世界的展開	実践神学演習
歴史書研究	宗教改革史	
新約聖書とその世界	日本の諸宗教とキリスト教	
福音書研究	宗教教育学	
パウロ研究	宗教心の発達	
新約聖書神学	キリスト教公共福祉	
	教会と法律	

## カリキュラムの理念

### 理念

キリスト教世界観に  
基づく一貫した  
実践的神学教育  
(専門基礎教育・  
専門教育)

宗教改革の神学と  
精神に基づく神学教育

日本とアジアと  
世界の教会に  
仕えるための  
文脈理解  
(思想、宗教、歴史、  
文化、社会)

### 目的

21世紀の教会と  
社会の未来を切り拓く  
教会教職者の養成

靈性の涵養と  
全人格教育

自主的・共同参加型の  
授業形態による  
クリエイティブな  
神学力の養成

### 実践

多様なインターンシップ  
(教会実習、異文化  
実習、福祉施設実習など)  
による他者理解と  
教会教職者としての  
実践力の涵養

牧会と伝道の実践力を  
養成するための  
多様でバランスのとれた  
系統的カリキュラム

説教につながる  
原典による聖書解釈と  
教会形成に仕える  
組織神学・歴史神学

## 神学研究科の教授陣(専任教員)



伊藤明生 教授 研究科専攻主任 Akio Ito

[教会] 日本バプテスト教会連合 市川北バプテスト教会  
[主な学歴] 東京大学文学部西洋古典学科、東京基督  
神学校、The Council for National Academic Awards  
(英国オックスフォード Wycliffe Hall) Ph.D. (新約学)  
[専門分野] 新約学  
[大学院担当科目] 聖書学特殊研究 I (旧約・新約聖  
書緒論)、聖書学特殊研究 II (聖書解釈学)、聖書学  
特殊研究 VII (新約聖書とその世界)、聖書学特殊研究  
IX (パウロ研究)、神学研究の基礎、神学総合演習、  
研究指導



稲垣久和 教授 Hisakazu Inagaki

[教会] 日本キリスト改革派 東京恩寵教会  
[主な学歴] 東京都立大学大学院 (理学博士)、アムス  
テルダム自由大学大学院哲学部・神学部研究員  
[専門分野] キリスト教哲学、公共哲学  
[大学院担当科目] 神学・教会特殊研究 II (宗教多元  
社会と公共哲学)、神学・教会特殊研究 IX (キリスト  
教公共福祉)、神学総合演習、研究指導



岡村直樹 教授 Naoki Okamura

[教会] 日本同盟基督教団 横須賀中央教会  
[主な学歴] トリニティー大学院キリスト教哲学：修  
士 (M.A.)、クレアモント大学院宗教教育：博士 (Ph.D.)  
[専門分野] 宗教教育学、現代神学、ユースミニストリー  
[大学院担当科目] 神学・教会特殊研究 VI (教会とミ  
ニストリー)、神学・教会特殊研究 VII (宗教教育学)、  
神学・教会特殊研究 VIII (宗教心の発達)、神学研究の  
基礎、神学総合演習、実践神学演習 I、研究指導



木内伸嘉 教授 Nobuyoshi Kiuchi

[教会] 日本長老教会 府中西原キリスト教会  
[主な学歴] 東京外国語大学、東京基督神学校、The  
Council for National Academic Awards (英国チェ  
ルトナム The College of St. Paul & St. Mary [現  
The University of Gloucester]) Ph.D. (旧約学)  
[専門分野] 旧約聖書  
[大学院担当科目] 聖書学特殊研究 I (旧約・新約聖  
書緒論)、聖書学特殊研究 III (五書研究)、聖書学特  
殊研究 VI (預言書研究)、神学研究の基礎、神学総合  
演習、研究指導



小林高德 教授 Takonori Kobayashi

[教会] 日本長老教会 柏シャローム教会  
[主な学歴] 東京外国語大学、東京基督神学校、セント・アンドリューズ大学神学部大学院 Ph.D. (新約学)  
[専門分野] ヨハネの福音書、黙示文学、パウロ神学  
[大学院担当科目] 聖書学特殊研究 VII (新約聖書とその世界)、聖書学特殊研究 VIII (福音書研究)、聖書学特殊研究 X (新約聖書神学)、神学総合演習、研究指導



ランドル・ショート 准教授 John Randall Short

[教会] 日本長老教会 佐倉王子台チャペル  
[主な学歴] 東京基督神学校、ハーバード大学神学大学院神学博士 (Th.D., 旧約学)  
[専門分野] 旧約神学、サムエル記、正典的解釈、キリスト教・ユダヤ教解釈  
[大学院担当科目] 聖書学特殊研究 IV (歴史書研究)、聖書学特殊研究 V (聖文書研究)



ステパノ・フランクリン 特別教授 Stephen Franklin

[教会] Evangelical Covenant Church of America  
[主な学歴] ノースバーク大学文学士、シカゴ大学大学院文学修士 (哲学専攻)、シカゴ大学神学院哲学博士 (Ph.D.)  
[専門分野] キリスト教哲学、宗教哲学  
[大学院担当科目] 神学・教会特殊研究 I (近現代のプロテスタント神学)、神学研究の基礎、研究指導



山口陽一 教授 研究科委員長 Youichi Yamaguchi

[教会] 日本同盟基督教団 市川福音キリスト教会  
[主な学歴] 金沢大学、東京基督神学校、立教大学大学院 (修士)  
[専門分野] 日本キリスト教史、実践神学  
[大学院担当科目] 神学・教会特殊研究 III (日本キリスト教史)、神学・教会特殊研究 VI (教会とミニストリー)、神学研究の基礎、説教演習 I、説教演習 II、実践神学演習 II、研究指導

## 聖書学

聖書学特殊研究Ⅰ  
(旧約・新約聖書緒論)

聖書緒論は、聖書を、執筆された当時の歴史的状況に位置づける聖書学の専門科目で、総論と各論に二分されますが、本科目では総論のみを扱います。旧約・新約聖書に共通するテーマとして、聖書原典本文の復元を試みる上での諸課題を扱う「本文論」と、どのような基準で各書が神的権威を帯びたものと判断されたかを歴史的に辿る「正典論」について講義します。(オムニバス方式 / 全 10 回)

木内伸嘉

旧約聖書緒論では、旧約本文の歴史と正典論、Stuttgartensia 版のヘブライ語テキストと Critical Apparatus を用いての本文批評の理論と実践を学ぶとともに、学問的諸説を背景としながら、多様な文学類型に属するテキストへの適切なアプローチについて考察します。(5 回)

伊藤明生

新約聖書緒論では、新約本文の歴史と正典論、Nes tle-Aland 第 27 版のギリシア語テキストと Critical Apparatus を用いて本文批評の理論と実践を教授します。また、様々な文学類型の特徴を学習し、解釈への基盤とすることを目的とします。(5 回)

聖書学特殊研究Ⅱ  
(聖書解釈学)

生きることは解釈することです。聖書を解釈する前に人は、誰もが自らを、また人生を解釈しています。本科目では、聖書を解釈・理解するとは一体どういうことかについて、古代・中世・宗教改革から、シュライエルマッハー、ガダマー、リクール、読者応答批評・受容理論、記号論・構造主義・ポスト構造主義、フェミニズム神学や解放の神学等の社会批評に至る近代及び近年の聖書解釈の方法論を、その背後にある哲学的枠組みを踏まえて考察します。講義に重点を置きつつ、各自が思想家またはテーマを選び授業で研究発表した上で、聖書解釈と関連付け考察を行う演習を行います。(伊藤明生 講義 18 時間・演習 12 時間)

聖書学特殊研究 III  
(五書研究)

「五書」は、旧約聖書内だけでなく新約聖書へとつづく流れの中で様々な聖書神学的なテーマを含むという点で極めて重要です。19世紀以来の五書研究では文書の生成過程が問われ、断片的に捉える見方が優勢でしたが、五書全体を有機的に見るアプローチが必要不可欠です。本科目は講義形式で、正典論的方法論を用い、人間の堕落、「信」の必要性、律法授与等のテーマを、五書の特定箇所の綿密な釈義を通して考察します。そこから「罪」「律法」「宥め」等のキリスト教にとって重要な概念の理解を深めることを目的とします。(木内伸嘉)

聖書学特殊研究 IV  
(歴史書研究)

旧約聖書「歴史書」の各書を相互に位置づけながら、全体の構成と時代背景について考察し、イスラエルの歴史物語を読む際に注意しなければならないヘブライ叙述の特徴について研究します。古代イスラエルの部族時代(ヨシュア記、士師記、ルツ記)、統一王国時代(サムエル記第一と第二、歴代誌第一)、分裂王国時代(列王記第一と第二、歴代誌第二)、捕囚後のペルシャ時代(エズラ記、ネヘミヤ記、エステル記)について伝承された文献の中心的なテーマ、解釈学的な課題、また研究方法論を考察し、各書の歴史的、文学的、神学的意義を追求します。授業方法は、講義に重点を置きつつ、演習を併用します。(ランドル・ショート 講義 18 時間・演習 12 時間)

聖書学特殊研究 V  
(聖文書研究)

旧約聖書「聖文書」を古代中近東の詩文学の中に位置づけて、聖書ヘブライ語の詩文体を分析します。ヘブライ詩文の主な特徴を踏まえた上で、各書のヘブライ語テキストと様々な翻訳を読み比べながら進みます。ヨブ記、詩篇、箴言、伝道者の書、雅歌について、講義と履修者によるプレゼンテーションに基づく演習を通して、「苦難と神義論」「象徴と隠喩」「ユダヤ教とキリスト教の多様な解釈学的アプローチ」等について考察し、詩文を解釈する能力を習得することも目指します。(ランドル・ショート 講義 18 時間・演習 12 時間)

聖書学特殊研究 VI  
(預言書研究)

旧約聖書「預言書」の理解のためには、同時代を描く預言書間の比較が有益です。「古代イスラエルの預言者はどのような役割とメッセージを担ったか」について、特にバビロン捕囚期の預言者エゼキエルを取り上げ、同時代の預言者エレミヤとの比較を通して探求します。本科目は、ヘブライ語テキストを用い、預言書研究の性格及び研究方法について専門的な知識と能力を習得することを目的とします。授業は、エゼキエルとエレミヤの預言の特徴についての講義を主とし、合わせて演習形式も取り入れます。(木内伸嘉 講義 18 時間・演習 12 時間)



新約聖書は、特定の歴史的状況のなかで書かれ、執筆者たちが生きた信仰・体験した文化や社会・闘った様々な試練を反映しています。新約聖書を理解するためには、それを取り巻く文化脈を適切に把握することが必要不可欠です。そのために初期ユダヤ教の文献、古代ギリシア・ローマ世界の文献、及び使徒教父文書等の初期キリスト教文献を研究し、新約聖書との関連を探ることが本科目の目的です。授業は講義を主とし、演習を併用します。（オムニバス方式 / 全 10 回 講義 18 時間・演習 12 時間）

伊藤明生

序論と結論に加え、ギリシア・ローマの諸宗教と諸哲学派、アレクサンドリアのフィロン、死海文書とクムラン共同体、フラウィウス・ヨセフス、使徒教父文書・ナグハマディ文書・新約聖書外典・偽典を担当します。（6 回）

小林高德

序論と結論に加え、ローマ帝国における皇帝礼拝、旧約聖書外典・偽典、ラビ教文献を担当します。（4 回）

本科目は、マルコ福音書を中心に黙示的終末論の様相を呈する「神の国」「キリストの受難と復活」のテーマと関わる箇所ギリシア語本文を、主に歴史的・文法的方法論を用いて釈義します。ナザレ人イエスの使信を、初期ユダヤ教黙示文学及び共観福音書の並行記事と比較対照し、その特質を歴史的な文脈の中で位置づけ、その今日的意味を探ります。その際、伝統的な歴史批評的方法論や物語論、社会学批評等の方法論の理解の深化を図ります。双方向を意識した講義を主体とし、演習の要素を組み入れて学生間の議論を促し、福音書の釈義の技術とセンスの習得を目指します。（小林高德 講義 21 時間・演習 9 時間）

聖書学特殊研究Ⅸ  
(パウロ研究)

本科目は、新約聖書において重要な位置を占めるパウロの神学を、彼がローマ教会に書き送った手紙に焦点を当てて解明することを目的とします。ガダマーが指摘した聖書の解釈の歴史である影響史の重要性に鑑み、ローマ書のうち神学的に重要で議論の対象となってきた箇所について、その解釈の歴史を辿りながらギリシア語本文において理解し、「キリスト（による）義認」「律法」「イスラエルの救い」等、パウロ神学の主要なテーマについて考察します。授業は、履修者がリーズナー著の教科書の該当箇所を要約し発表する演習と、神学的・歴史的・文法的方法論を用いた講義によって行います。（伊藤明生 講義 18 時間・演習 12 時間）

聖書学特殊研究Ⅹ  
(新約聖書神学)

新約聖書に表現されている神学を、初期ユダヤ教及び古代ギリシア・ローマ世界の文化と社会との関わりのなかで具体的かつダイナミックに理解し、今日における意味を探ることを目的とします。前半は、「キリストの主権」が持つ社会的意味を、古代ギリシア・ローマ社会の政治論・家政論・友情論との関わりで考察します。後半は、ヨハネ福音書の物語論的枠組みの中で展開されるキリスト論・弟子論を、続いてローマ書 8 章の宇宙論的終末論・祈禱論・神論について先述の友情論との関わりで考察します。授業は、講義と演習を併用します。（小林高德 講義 18 時間・演習 12 時間）

## 神学・教会

### 神学・教会特殊研究Ⅰ (近現代のプロテスタント神学)

本科目は、宗教改革以降大きく変化したキリスト教神学の流れを、近代から現代にかけて、その社会文化背景と照らし合わせながら、深く理解し、その中から今日のグローバルなコンテキストにおけるキリスト教の抱える神学的課題や今後の方向性を探ることを目的とします。敬虔主義と啓蒙主義がキリスト教に与えた影響、20世紀のプロテスタント神学に大きな足跡を残した弁証法神学とそれに連なる神学者達の主張、また、資本主義社会の生み出した問題点としての競争社会・格差社会・環境問題等を扱った様々な神学について講義形式で考察します。(ステパノ・フランクリン)

### 神学・教会特殊研究Ⅱ (宗教多元社会と公共哲学)

キリスト教と他宗教との共存は、宗教多元の状況にあるグローバル化した現代世界において不可欠です。宗教を私事と見なした啓蒙主義以来の西洋学問論に代わって、公共の場に宗教を位置づける理論の展開が求められています。本科目は、ポスト啓蒙主義の学問論を認識論と存在論において明示し、そこにおける哲学的解釈学の重要性を指摘します。そこから生活世界に生きる宗教人が、どのように、「異質な他者」と触れ合うことで自己理解を増し、他者理解の一環としての他宗教理解を深め、対話、共存、協力が可能か、考察する講義を行います。(稲垣久和)

### 神学・教会特殊研究Ⅲ (日本キリスト教史)

日本キリスト教史の中で、特に「日本プロテスタントの戦後史」に焦点を当て、各時代のキリスト教を複眼的に考察するために演習を交えた講義を行います。本学の背景にあるプロテスタント諸教派の戦後史を、日本キリスト教協議会所属教派のそれと比較検討し、その特徴と課題を考察することで現代の教会の社会的課題と使命を理解することを目指します。加えて教会アーカイブズの作成と教会史編纂の課題を検証します。授業形態は、講義と演習を併用します。(山口陽一 講義 18 時間・演習 12 時間)

今日キリスト教は、世界的な広がりをみせ、特にアジア・アフリカ・中南米における教会の展開が顕著です。その中で、現代の世界に共通する課題（グローバル化による人・モノ・情報の移動）とともに、地域独自の課題があります。それらは、従来の欧米的な視座からの神学的・宣教学的な研究主題では十分に扱うことができません。本科目は、アジアの現状を切り口として、グローバル化の様相を見せる世界と地域社会におけるキリスト教会の実践と課題を、神学的・宣教学的・社会学的・異文化理解的視点から講義します。（オムニバス方式 / 全10回）

宮脇聡史

グローバル化について、近代国際体系や国民文化への衝撃に着目しつつ、もたらされる重層的な社会変容と意識の変化を軸に分析します。その上で、アジア、日本におけるグローバル化の現状を学び、その教会における展開を考察します。近年の諸研究に照らしつつ、立体的・多面的に学びます。（5回）

倉沢正則

南半球におけるキリスト教の展開の様相とその原因を、宣教の歴史や文化的・社会的側面から考察します。また、今日「グローバル・クリスチャニティー」として理解されている概念や関連する課題を学び、異文化理解的視点を持って日本の教会が世界大に広がる教会との協働する可能性について探求します。（5回）

宗教改革は、プロテスタント・キリスト教の成立にとって決定的な役割を果たただけでなく、教会と神学の発展の歴史において重要な意義があります。本科目は、プロテスタント宗教改革について、神学的・思想史的・歴史学的方法論を用いて、教会改革の観点から分析を行うことを目的とします。宗教改革前史としての中世後期西方教会、教会改革諸運動、ルネサンス・フマニズムという背景理解から始め、エラスムスの教会刷新とルターの改革、ツヴィングリ、急進派、ブーツァー、メランヒトンとルター派正統主義教会、カルヴァン、ベーズ、英国ピューリタニズム、それぞれの宗教改革運動について、当該史料を参照しつつ講義を行います。（丸山忠孝）

本科目は、伝道学・牧会学・礼拝学の基礎知識を前提として、それらの分野の学問的な検証と実践的な統合を目的とします。複雑化し変動する今日の日本における教会のミニストリー(働き)の諸課題を考察し、教会教職者としての学識と実践への適用力を身に付け、求められる倫理性を養うことによって、将来の働きに備えることを目的とします。授業形態は、講義と演習を併用します。(オムニバス方式/全10回 講義18時間・演習12時間)

山口陽一

教会とミニストリーの今日的課題について、現状と伝統的日本社会、信徒と教会教職者の視点から、教会教職者が果たすべき役割を認識し、その技量を身に付けるとともに、リーダーシップと自己管理能力の修得を目標とします。教員の実務経験やケース・スタディーを元に講義と演習を行います。(5回)

岡村直樹

ミニストリーにおける異文化理解の重要性と、世代を超えた共同体として存在すべき教会のあり方を確認しつつ、教会運営における人間の理解と協働について講義形式で学びます。またグラウンデッドセオリーを用いた評価方法を習得し、教会教職者に必要な実践的問題分析のスキルを演習形式で学びます。(5回)

日本の公教育における宗教教育に関する議論や研究を対象とする「宗教教育」とは異なり、欧米の多くの高等教育機関において確立した学問である「宗教教育学 (Religious Education)」は、宗教の概念、教義、儀式、習慣、歴史等の伝達プロセスやその方法論等を取り扱います。前半は、講義形式で宗教教育学の歴史的背景と全体像を把握しつつ、今日における宗教教育学的視点の有用性や課題について理解を深めます。後半は、宗教教育学研究の第一人者であるメリー・エリザベス・モアー (Boston University) が提唱する5つの宗教教育方法論と、それらの実践的取り組みについて演習形式で学びます。(岡村直樹 講義21時間・演習9時間)

神学・教会特殊研究Ⅷ  
(宗教心の発達)

本科目は、宗教的回心や献身といった宗教と人間の関係性の変化に関わる現象に着目し、そのプロセスやメカニズムの理解を目指します。ジェームス・ファウラー (Emory University) の心理的発達理論を応用した「信仰発達論」から、宗教心の発達の基本概念を学び、続けて、ジョン・ロフランド (University of California, Davis) 等の研究を通し、宗教的回心の類別や、それらの社会的・文化的・心理的背景との関連における宗教心の発達について考察します。また、キリスト教が重視する「共感力の涵養」「相互愛の形成」との関わりで宗教心の発達とその社会的意味について考察します。授業形態は、講義と演習を併用します。(岡村直樹 講義 18 時間・演習 12 時間)

神学・教会特殊研究Ⅸ  
(キリスト教公共福祉)

福祉の基礎構造改革以降、日本の福祉や社会保障のあり方が模索される中、キリスト教はどのような役割を果たしたらよいのでしょうか。本科目は、日本における福祉が従来の措置制度から契約制度に転換したことの歴史的、構造的意味を、ヨーロッパの国民教会とアメリカの自由教会のあり方が、それぞれの福祉社会の特徴を規定した歴史と対照することで、明らかにします。その上で、市民主導による社会の形成のために必要な「新しい公共」という理念について考察します。その理念を福祉社会に応用する「公共福祉」論に加え、福祉の倫理とスピリット、社会保障と福祉、地域福祉と教会の役割について考察します。授業形態は、講義と演習を併用します。(稲垣久和 講義 18 時間・演習 12 時間)

神学・教会特殊研究Ⅹ  
(教会と法律)

教会は、国家の枠組みの中で、法律による保障・保護や規制を受け、種々の権利義務の主体または客体となり、様々な機関団体や人々との契約関係や不法行為関係を有し、社会的責任を負っています。本科目は、教会を取り巻く法律制度や法律による保護保障・権利義務の全体像を把握し、宗教活動に伴う法律上の諸課題についての理解を深めることを目的とします。教会の設立・管理・運営等に関する法律の内容とその問題点について講義します。講義内容とのかかわりで裁判員制度、家族制度、相続制度、処刑制度等についても扱います。(櫻井圀郎)

日本は元来諸宗教が混淆する宗教多元的な社会を構成してきました。日本宗教の大きな流れを仏教が渡来する以前、仏教・儒教の渡来後、キリスト教の渡来後に分けて講義します。キリスト教の立場から日本の諸宗教に初めて弁明を行った不干斎ファビアンに注目し、日本の諸宗教とキリスト教が内包する普遍的な問題を考えます。また、在留外国人の中に信奉者が多く、宗教多元的な現代世界で重要性を増すイスラームについても、その特質について講義します。さらに、日本における神学の実践の際重要となる、日本の通過儀礼全般と、変容の渦中にある葬送儀礼のあり方について考察します。（オムニバス方式 / 全10回）

大和昌平

禅僧からイエズス会修道士となった不干斎ファビアン（1565 - 1621）は、仏教・儒教・神道に対してキリスト教を弁明した最初の書『妙貞問答』を著しました。日本宗教史の概説を行った後、ファビアンの古典的なテキストを読み、日本の諸宗教とキリスト教に関わる論点を分析し、宗教多元化した現代における課題を考察します。（6回）

清野勝男子

現代世界において宗教的にも政治的にも避けて通れないイスラームの教義や儀礼について講義します。加えて、少子多死社会と言われる現在、日本の通過儀礼として葬送儀礼がもつ意味をキリスト教宣教の立場から考えます。（4回）

## 研究・演習

### 神学研究の基礎

本科目は、1年次の学生に対し神学の総合的・学際的な研究という観点から、「聖書学」領域及び「神学・教会」領域における重要な文献を紹介しつつ、それぞれの基本課題を理解させ、神学研究のための諸方法論を導入することを目的とします。専任教員による講義を行います。(オムニバス方式/全5回)

木内伸嘉

旧約聖書学の課題を学生に理解させ、研究の方法論を導入すると共に、重要な基本文献の紹介、学術雑誌や文献検索の方法について教授します。(1回)

伊藤明生

新約聖書学の課題を学生に理解させ、研究の方法論を導入すると共に、重要な基本文献の紹介、学術雑誌や文献検索の方法について教授します。(1回)

ステパノ・フランクリン

キリスト教哲学と組織神学の課題を学生に理解させ、研究の方法論を導入すると共に、重要な基本文献の紹介、学術雑誌や文献検索の方法について教授します。(1回)

山口陽一

日本キリスト教史及び歴史神学の課題を学生に理解させ、研究の方法論を導入すると共に、重要な基本文献の紹介、学術雑誌や文献検索の方法について教授します。(1回)

岡村直樹

実践神学及び宗教教育学の課題を学生に理解させ、研究の方法論を導入すると共に、重要な基本文献の紹介、学術雑誌や文献検索の方法について教授します。(1回)



学生が選択した神学上の主題に関する修士論文の作成指導を行います。1年次には、研究に関する関心や問題意識を明確にさせ、学問的、実践的価値を有し、かつ研究可能な主題を設定します。またそれらに対する既存研究の学術的水準の理解や独創的な学術的知見の創出に留意させしつつ、論文作成に必要な、資料・文献の収集、及び調査・研究の方法を指導します。2年次に学生は、既存の研究水準との比較、報告と討論を積み重ね、論文の論理的整合性の確認を経て、論文を完成させます。

#### 木内伸嘉

「聖書学」領域の、特に旧約聖書学に関する研究について論文指導を行います。1年次は、学生が選択した課題が持つ言語的・釈義的・神学的な側面を学術的に把握させ、文献の収集・検討を通して、論文の主題と枠組みを確定します。2年次は、論文作成状況の定期的報告と教員と学生による討論により、論文としての精度を上げることを目指します。学生が選んだ主題に沿って指導し、既存の研究を確認しつつ、指導を行います。

#### 伊藤明生

「聖書学」領域の、特に新約聖書学及び聖書解釈学に関する研究について論文指導を行います。1年次は、新約聖書における様々な課題に関する研究や、歴史的時代背景を対象とした研究に関する考察を深めつつ、今日的に意義のある研究となるように、主題の絞り込みを指導します。2年次は、定期的な論文作成状況の報告と討論をし、既存の研究水準との比較や、論文の論理的整合性を確認しつつ、指導を行います。

#### 小林高德

「聖書学」領域の、特に新約聖書学及び聖書神学に関する研究について論文指導を行います。1年次は、学生の問題意識を掘り下げ、先行研究の文献目録の作成を通して主題の絞り込みを指導します。福音書研究、新約聖書の歴史的・社会学的研究、初期ユダヤ教黙示文学、新約聖書神学などに関するテーマについて研究能力の開拓を図ります。2年次は、定期的な討論と個人指導を行い、学術的水準の維持、論理的一貫性と創造性を持った論文となるよう指導を行います。

## ステパノ・フランクリン

「神学・教会」領域の、近現代の組織神学や思想史に焦点を当てた歴史神学に関わる研究について論文指導を行います。1年次は、学生の問題意識や研究に対する関心を喚起し、学生の主題の絞り込みを指導します。プロテスタント・キリスト教の神学史と、その今日的なコンテキストにも注目し、意義のある研究の実施を目指します。2年次は、論文作成状況の定期的な報告と討論を行い、既存の研究水準との比較や、論文の論理的整合性を確認しつつ、指導を行います。

## 稲垣久和

「神学・教会」領域の、特に公共哲学、公共福祉、キリスト教哲学等の研究について論文指導を行います。1年次には、研究に関する関心や問題意識を明確にさせ、学問的、実践的価値を有する研究可能な主題を設定できるよう指導します。2年次に、既存の研究との比較や、論文の論理的整合性の確認を経て、報告と討論を積み重ね、研究を完成するよう指導します。

## 岡村直樹 / 山口陽一（補助教員）

「神学・教会」領域の、実践神学に関わる研究、特に宗教教育学、宗教心の発達について論文指導を行います。1年次は、教会の様々なミニストリー（働き）に関する研究や、人間を対象とした研究への理解を深め、異文化理解や世代間理解といった現代の教会の課題にも注目しつつ、主題の絞り込みを指導します。2年次は、定期的報告と討論を通し、研究水準を満たすよう、指導を行います。

神学が意義深いものとなるためには、多様な視点からの学際的な考察と、それを実践と結びつける応用力とを必要とします。本科目は、2年次秋学期に学生全員を対象とし、担当教員の指導のもと、今日的な神学上の課題について共同研究を行い、他者と協働する能力を身につけることを目的とします。演習には専門領域を異にする複数の教員も加わって、学際的な視点から総合的に討論します。(共同 / 全 10 回)

木内伸嘉

「聖書翻訳と聖書解釈」:「贖い」と訳されるヘブライ語とギリシア語を比較し、起点言語と目標言語の間にある言語上・文化上の相違から来る聖書翻訳の諸問題を考慮しつつ、今日的達意性について総合的に考察します。(2回)

伊藤明生

「新約聖書の女性観」:現代では違和感を覚えるような女性に関する新約聖書の諸言説を、価値観が異なる当時の文化脈に位置づけてその意図を読み取り、今日的意義について神学的・学際的視点から総合的に考察します。(2回)

小林高德

「聖書神学の人間論と臓器移植」:生体臓器移植や脳死による臓器移植の課題について、主に聖書神学における人間論の視点から考察し、キリスト教哲学・神学、キリスト教倫理、実践神学の諸側面からも検討します。(2回)

稲垣久和

「賀川豊彦と現代思想」:賀川豊彦の思想と実践を、『友愛の政治経済学』を主要なテキストとして公共哲学の視点から再検証し、神学的・学際的視点から総合的に考察します。(2回)

岡村直樹

「キリスト教と死生観形成」:高齢化が進み、自殺者が年間3万人を超え、東日本大震災を経験した日本において重要性を増している死生観について、キリスト教神学の視点から、また学際的に考察します。(2回)

## 説教演習 I

本科目は、聖書の釈義から論理的に整った説得力のある説教を行う技能を養うことを目的とします。学生は、新約聖書の多様な書物からテキストを選び、適切な聖書解釈と黙想をとおして作成した説教原稿に基づき、自然に演述する技能を身に着けるために、他者からの批評を通して学びます。聴く側は、説教批評の能力を養うとともに、それを自らの説教に役立てることを目指します。毎回、学生が説教を行い、これに対して他の学生と教員とで説教批評を行います。その後、説教した学生は、準備と説教における問題点を述べ、さらに批評に対してコメントし、全体での討論を行います。(山口陽一)

## 説教演習 II

「説教演習 I」をふまえ、教理、礼典、教会暦、冠婚葬祭等に関して、学生が選定した聖書箇所に基づく主題説教の演習を行います。また教会の会衆(新来者、青年、女性、老人、障がい者など)の多様性を視野に入れ、十分な準備を行い、聴衆とのコミュニケーションや応答を促す適応を、より強く意識した説教を求めます。完全原稿を用意した上、アウトラインのメモのみを用いた説教も試みることで、より自然に演述する技能を身に付けることを目指します。毎回、学生が説教を行い、これに対して他の学生と教員とで説教批評を行います。その後、説教した学生は、準備と説教における問題点を述べ、さらに批評に対してコメントし、全体での討論を行います。(山口陽一)

## 実践神学演習 I

本科目は、学生の教会経験に基づき、神学上の学識を応用する際の諸問題を取り扱い、教会教職に関する理解を深め、実践的应用能力を修得することを目指します。学生は、教会の多様な活動に積極的に関わり、「日曜学校教師」「ユースグループリーダー」「聖書研究会リーダー」等の働きについて神学的・実践的に検証し、発表します。討論を通して、教会教育・ユースグループ形成・他者理解と協働に必要な理論、知識、技術、また求められる人間像と倫理性について考察します。(岡村直樹)

## 実践神学演習 II

本科目は、「実践神学演習 I」の延長線上に位置し、特に「礼拝形式と礼典」「祈りと説教」「役員会運営」「伝道活動」「地域社会における奉仕活動」等との関わりで、教会教職者の職務に関する学生の理解を深め、実践的应用能力を高めることを目的とします。学生は、神学上の学識を実践の場へ応用する際に直面する諸課題を、教会の活動を継続する中で上記の主題を神学的・実践的に検証し、演習において討論を行い、相互に研鑽します。(山口陽一)

# 大学院設置趣意書を読むにあたって

学部長 小林高德

「東京基督教大学に大学院神学研究科を設置する趣旨等」(以下、「趣意書」31頁以降)は、本大学院の本学と社会にとっての必要性、教育理念、カリキュラムなどの計画を記した、設置申請のための諸文書の主要なものです。ここに、その性格や作成の背景について簡潔に触れたいと思います。

本大学院の教育理念は、東京基督神学校の募集停止の決まった2009年3月、2日間に及ぶ集中的な議論を出発点としています。メンバーは、神学校から山口陽一・柴田敏彦、神学部から倉沢正則・大和昌平・菊池実・岡村直樹・小林高德、それに高橋信希職員。学部2年・大学院2年で行う新しい教会教職者養成の教育理念は、その際にまとめ上げられました。本大学院の理念も、その延長線上にあります。

神学科に教会教職専攻を開始した2010年4月、大学院開設準備室が立ち上げられ、大学院設置の準備が本格化します。支援諸教会への説明、多くの有識者への相談、文部科学省との折衝等とおして趣意書が作成されました。特に、2011年には3.11後の余震の続く中、最終的な作成作業を行い、教職員の一致協力によりまとまったものとなりました。

## 「趣意書」の性格

趣意書は、文部科学省に提出された大学院の計画書です。ですから、キリスト教会を念頭におきつつも、設置審査を行う大学設置分科会を構成する哲学や宗教学などの分野の大学教員(キリスト者とは限らない)や、本書を公開した際に読むことになる一般の読者も考慮して書かれています。本学は、教会と社会に仕えるキリスト者の働き人を養成することで、社会の共通の益を実現する高等教育機関ですが、本趣意書は市民社会に対してキリスト教の大学院設置の必要と意義を訴える内容となっています。

ですから、できるだけ神学用語を用いず、一般の読者にも理解できる表現を用いるという点に力を注ぎました。それは同時に極めて神学的で宣教論的な作業で、ともすると神学用語を羅列して議論することに慣れている私たちにとって大きなチャレンジでしたし、日本におけるキリスト教大学の意義について、また、本学にとっての大学院の存在意義を熟考する良い機会となりました。

この作業において再発見したことのひとつに、社会の共通の善に貢献するものとしてのキリスト者と教会のあり方でした。それはすでに、本学が国際キリスト教学科において、また最近では、キリスト教福祉学専攻において追い求めていることです。そのことが教

会の宣教の発展を促し、キリストの統治の拡大に寄与することであることを確信するようになりました。神学教育の本質が、生活の全領域においてキリストの統治を実現してゆくという、神の国の福音と関わっていることを再認識することでありました。今般の東日本大震災・津波と原発事故の経験をとおしても変わることはない、全被造物と、また、教会と共に苦しまれるキリストの苦しみに参与する働きに信仰者を整える教会教職者の務めに深くかかわっていることを教えられました。

## 本大学院の性格・特徴

本学設置時には、文部省（当時）に「福音主義」を説明することに多くの労力を費やしたと聞いていますが、今回それは「建学の精神」として前提されています。本大学院は、福音主義に立つ神学教育機関であることに変わりはありません。

### ①本学における大学院の位置づけ

本大学院（神学研究科）は、神学部全体の上に設置されます。それは、広くキリスト教リベラル・アーツ教育に立った、キリスト教福祉学専攻と国際キリスト教学専攻で構成される国際キリスト教福祉学科と神学科の教育と研究の全体を反映するためです。そうすることで、グローバル化した世界と高齢化社会に仕える教会教職者や神学研究者・教育者の養成が可能となります。

### ②「高度専門職業人」養成と2つのコース

大学設置基準では、大学院の修士課程において、研究者だけでなく「高度専門職業人」を養成することが可能とされています。牧師・宣教師・伝道師・教会主事などの教会教職者の働きは、高度専門職業人と呼ぶにふさわしい働きです。本大学院は、教会教職者の養成（「教会教職者コース」）を主眼におきつつ、神学研究者・教育者の養成（「神学研究者・教育者コース」）をも行うことを目的としています。

### ③カリキュラム（教育課程）

本大学院の研究の領域は「神学」です。それを、「聖書学」領域と「神学・教会」領域とに分類して科目が提供され、研究が行われます。「聖書学」領域は本学の強みですが、それと合わせて、「神学・教会」領域の歴史神学・組織神学・キリスト教哲学と実践神学をバランスよく配備しています。特に、「公共福祉」をカリキュラムに加えた伝道者養成課程は本大学院の特徴であり、また、稀であると思います。少子高齢化が進む日本

の社会にいかに関わり込んで教会を形成し宣教を推し進めるかについて考察し、実践する方策を学ぶ機会を提供します。また、グローバル化の度合いを強める社会における宣教と教会形成についても学びます。

#### ④実践的神学教育

大学院といいますと、研究機関との印象があるかもしれませんが。しかし本大学院は、研究とともに、建学の精神である「実践的神学教育」を目指します。教会における奉仕・実習を「実践神学演習」をとおして再帰的に評価し、学生個々の牧会者・宣教者としての資質の向上と新たな実践へとつなげられるよう配慮しています。また、最終年度には、全教員・全学生が関わる「神学総合演習」で、今日の神学的課題を共同で研究し、異なる他者と協働する力を磨く計画です。

#### ⑤教授陣

教授陣は、専任教員8名、非常勤教員6名で構成されますが、全員すでに学内にいる教員で構成できたケースは稀であると思います。専任教員は、設置審査会による資格審査を通ることができました。それも、本学の専任教員の努力に留まらず、自らを犠牲にして将来の教員の育成に心を砕かれた諸先輩方の働きと、長い期間にわたる諸教会の祈りと支援の賜物であると確信します。時間はかかりましたが、神の善しとされる時が今であったと言うことができましょう。

まとめとして、次の3点を挙げることで、この箇所を閉じたいと思います。

東京基督教大学（TCU）は、国外のミッション（宣教団体）によって人的にも経済的にも支援を受ける大学でもなければ、教育をとおして伝道することを目的とするミッションスクールでもありません。TCUは、キリスト者の学生を受け入れ、教会と社会に仕える働き人を養成する「キリスト教大学」です。建学の精神の根底にあるこの理念は、大学院設置によってよりいっそう強化されることとなります。

大学院での教育は、趣意書に始まるとはいえ、それで終わりではありません。趣意書で計画されたことを、学生個々人との接点の中で、また、学習共同体の中でいかに実現してゆくかという、主要な働きとしての教育が始まりました。本大学院をとおして、教会と社会に仕えるキリスト者の指導者の養成を掲げる本学の教育がさらに進展することを願うものです。

大学院設置申請をする過程で、先人たちの描いた幻の雄大さと卓越さを悟る経験を何度かしました。その幻のひとつを果たした今、本学はその遺産を継承し発展させる新しい幻を祈り求めています。この「趣意書」にその予兆を見ることができると言えましょう。皆様のご支援をお願いします。

# 趣意書 東京基督教大学に大学院神学研究科を設置する趣旨等

東京基督教大学は、平成2年（1990年）4月の開学以来、プロテスタント宗教改革の伝統に立つ教育理念に則り、キリスト教世界観に基づくリベラル・アーツ教育と神学教育の統合により、教会と社会に仕える市民の教育を実施し、またその中で教会教職者の養成を行ってきた。本学では、開学当初より大学院設置について検討を重ねてきたが、学校法人東京キリスト教学園理事会は、開学20周年を迎えた平成23年（2011年）3月22日に、平成24年度（2012年度）開設を目指して東京基督教大学大学院神学研究科神学専攻（修士課程）の設置申請をすることを決議した。その計画内容は、大学卒業者を対象とする3年制の専修学校である併設の東京基督神学校を廃止し、新たに、高度専門職業人としての教会教職者（牧師・宣教師・伝道者・教会教育従事者・教会主事等）の養成を主要な目的とし、加えて神学研究者・教育者を養成する大学院修士課程（2年制：入学定員18名）を設置するものである。

---

## I 設置の趣旨及び必要性

### 1. 本学における教会教職者養成の課題と大学院設置の必要性

#### (1) 建学の精神と神学教育の特色

本学の建学の精神は、「プロテスタント福音主義信仰に立ち、教派を超えて21世紀の教会と社会に奉仕する世界宣教の働き人を育成するために、実践的な神学教育を施す」ことである。この建学の精神に基づき、開学以来、「キリスト者である男女を牧師、伝道師、宣教師およびその他のキリスト教奉仕者として養成すること」（学則）を目的とし、国内外の教派・教団を超えた教会の支持を受けつつ、国際性とキリスト教的教養及び実践力を重視した神学教育を行ってきた。これまでに、600名を超える卒業生を、国内外の教会、宣教団体、NPO/NGO、キリスト教系及び一般の企業等に輩出している。

本学は神学部のみ単一学部大学であるが、学部内に「神学科」と「国際キリスト教学科」を設置してきた。「神学科」では、学則に「牧師、伝道師、宣教師」の養成とある通り、高校卒業者を対象に教会の多様な働き（ミニストリー）に携わる教会教職者の養成を重要な目的としてきた。異文化理解や国際救援等を視野に入れた人材養成を行ってきた「国際キリスト教学科」は、平成20年（2008年）に「国際キリスト教福祉学科」



に名称変更し、同学科内に「国際キリスト教学専攻」と「キリスト教福祉学専攻」を設置し、世界と地域社会に奉仕する人材を養成する幅広い神学教育を行っている。

他方、本学の設置者である学校法人東京キリスト教学園は、大学卒業者を対象とする東京基督神学校を本学校舎に隣接して設置し、本学が担ってきた高校卒業者を対象とする教会教職者養成の課程と役割分担を行ってきた。

## (2) 本学神学部の課題と大学院設置の必要性

大学開学当初は、卒業後、教会教職者となる者が多く、神学科における教会教職者養成の目的は達成されていた。しかし、時間の経過とともに神学科における学生の進路が多様化し、教会教職者養成を主眼とした教育課程の再考が迫られるようになった。それを受けて、平成18年（2006年）にカリキュラムの改編を行い、教会教職志願者の意識付けを明確にするために履修モデルとして「教会教職養成プログラム」を提供することとした。

しかしながら、本学神学科卒業後に、東京基督神学校や国内外の他の神学校に入学・留学する者が全体の約20%を占めるようになり、卒業直後に教会教職に就く者の割合が減少する傾向にあった。【参考資料①a：東京基督教大学卒業者のうち神学校に入学した者の割合】【参考資料①b：東京基督教大学神学部神学科卒業者の「教会教職者」の割合】。その結果、本学神学科の教育課程が、次の段階の学びによって補完される専門基礎教育課程としての意味合いを持つようになり、それ自体では教会教職者養成を完結することが困難になっていた。建学の精神を達成するためには、新たに専門教育課程を設置し、大学内で教会教職者の養成を完結させることが不可欠である。

さらに今日、教会教職者には学際的で高度な問題解決能力や社会への提言や貢献が求められているが、専修学校の教育の枠組みでは十分に対応出来なくなっていた。特に、国際化し複雑化する今日の教会と社会にあっては、批判的な分析能力と、創造的統合能力が求められており、こうした能力を涵養するための系統だった大学院における専門教育課程が必要とされている。従来専修学校に代わって、本大学院で高度専門職業人養成を行う必要性和利点は以下のとおりである。

①従来、専修学校では、大卒者に対して3年間の神学教育を行ってきたが、教育課程には聖書ギリシア語・ヘブライ語入門文法と講読や神学に関する入門科目も含まれ、短期間で数多くの科目を履修する必要があるため知識伝達型の教育が中心であった。それゆえ、神学知識を深く掘り下げ、教会と社会の複雑化する諸課題に適用させるための分析・統合能力を涵養するには十分ではなかった。また、教会教職者の養成が個々人に焦点を置いてなされ、今日の複雑な諸課題に協力して対応するための諸能力の涵養は十分には

なされていなかった。それに対して本計画では、専修学校で受け入れていた他大学の卒業生を、本神学科3年次に編入学させている。本大学院では、学部における神学の専門基礎教育（聖書ギリシア語・ヘブライ語入門文法と講読を含む）の土台の上に、さらに高度な神学知識の教授と研究が可能になる。特に、演習科目と研究指導に加えて、多くの科目で講義形式だけでなく演習形式を併用することで、学生が独自に、また、共同で研究を行い、個人としてだけでなく他者との協働により、複雑な諸課題に対応する諸能力を養うことができる。

②狭義の神学教育を行っていた専修学校とは異なり、本大学院においては、グローバル化し、少子高齢化する教会と社会の必要に応えるため、本学国際キリスト教福祉学国際キリスト教学専攻およびキリスト教福祉学専攻での教育研究をも反映させた高度専門教育を行う必要がある。専修学校での教会教職者の養成は、将来教会に仕えることを主眼に行われてきたが、本大学院では、それに加えて、本学の、教会と社会に仕える奉仕者を養成するキリスト教リベラル・アーツ教育の伝統に立って、教会と社会の安寧と発展に貢献することを視野に入れた人材養成を行うことを目指す。

③専修学校の教員組織としては専任教員が5名（神学科3名、音楽科2名）で、実務経験者が中心であった。本大学院においては、神学研究者7名（内4名は実務も経験している）と実務経験者1名の専任教員を置くことで、実践性を重んじた高度な専門教育を学生に手厚く実施することが可能となる。

④本大学院は、教会教職者という高度専門職業人養成を主としており、専修学校の専門職業人養成課程において行われてきた神学の実践者の訓育を、より高度な神学教育と研究能力の涵養をおし、また深い霊性と人間理解力を培うことで、さらに深化・充実させることを目指している。

以上のように、本大学院は、高度専門職業人としてのプロテスタントの教会教職者の養成に主眼を置くが、それは同時に、教会教職者とともに次世代を担うプロテスタントの神学研究者・教育者の養成をも可能にする。開学20年を過ぎ、教員の世代交代の時期を迎えた本学の後継者養成の必要性にも応えることができる。

### （3）神学研究の現状と大学院設置の必要性

今日のグローバル化した世界では、神学教育研究機関においても国境を越えた交流や協力が盛んとなっている。本学では、平成22年（2010年）に米国シカゴ郊外にあるトリニティー神学大学院と合同で国際神学会議を主催したが、7カ国を代表する多くの研究者が出席し、有意義な会議となった。神学上の研究交流が、今日の「知識基盤社会」への貢献をもたらすことは明らかであり、それをさらに実現してゆくためには大学院にお

ける教育研究が不可欠である。

日本では現在、5つの大学に教会教職者養成を目的とする大学院が設置されている。1校が北九州、2校が関西、残る2校が関東であるが、関東の1校はカトリックの神学大学院である。特に、教会数も信者数も最も多い関東には、現在教会教職者を養成するプロテスタントの神学研究科を設置する大学院は1校のみである。さらにこれらの大学院は、主として一つの教派・教団から学生を受け入れて教会教職者の養成をしており、本学のように広くプロテスタントの諸教派・諸教団から学生を受け入れている超教派の神学教育研究機関とは性格を異にしている。ここに本研究科設置の重要な根拠がある。

## 2. 高度専門職業人としての教会教職者養成の社会的要請

### (1) 教会教職者養成のあり方と「知識基盤社会」

本来、教会教職者は、キリスト教正典としての旧約・新約聖書の今日的意味を教会と社会の必要のために解釈して提示し、生きる意義と希望を与えることにより、信者を教会と社会において奉仕する人材として整える務めを負っている。また、社会の矛盾に対して直接あるいは間接に参与し、弱者に寄り添うことによって人々の痛みを共に負い、社会正義を実現し平和を造り出すという公共の善に貢献してきた。教会教職者には、これらの働きに必要な卓越した価値観、専門的学識、倫理性と品格が求められている。そのような教会教職者の養成は、歴史上、ヨーロッパにおける大学設置の重要な理由の一つであり、高度な学問的研鑽を必要とするものであった。すなわち、旧約・新約聖書をヘブライ語及びギリシア語の原語において解釈し、それをキリスト教の歴史と現状に照らして検証し、教会を通して社会に奉仕するための総合的で高度な能力を養成することが、大学本来の重要な任務であった。このような教会教職者養成は、今日では大学院や専門職大学院の修士課程で行われるのが世界的に通例となっている。

今日の教会教職者に求められる素養は、中央教育審議会答申「新時代の大学院教育」が指摘する、今日の「知識基盤社会」においてまさに求められているものであり、本研究科では、大学院の人材養成機能としての「高度な専門的知識・能力を持つ高度専門職業人の養成」に強調点を置く。すなわち、教会教職者として教会における実践と、社会における公共の善の実現への貢献のために、神学に関する高度な専門的知識と研究能力を基礎とし、またそれらを応用する能力を身に付ける教育を目指すものである。

### (2) 新しい教会教職者養成が求められる今日の状況

本学に、新たな教会教職者養成のための大学院設置を要請する今日の社会及び教会を取

り巻く状況として、以下の諸点が挙げられる。

### ①ポスト近代の価値の多様化と意味の喪失の時代

現代は「ポスト近代(または、再帰的近代)」と呼ばれ、価値観が多様化・多元化する一方で、意味の喪失を招いていると指摘される。また、都市化が急速に進む中、伝統的な共同体の結びつきが失われ、モノドのような「孤独な群衆」を生み出している。特に若い世代にあっては、一個人のうちに価値観の多様性を抱えつつ人格としてのバランスを欠く傾向が見られ、一貫した価値観としての信念の形成が顧みられなくなっていると指摘される。このような現代社会にあって、個々人の魂への配慮と生きる意味や労働の意義、家庭や共同体のあり方、また社会における奉仕の意味を提供する指導者としての教会教職者の働きは、極めて重要であると考えられる。

とりわけ、東日本大震災を経験したこの国にあって、キリスト教神学に基づき、人間存在の根源に関わる問いと向かい合い、人間としてのあり方を阻害する(非人間化をもたらす)諸思想を批判するにとどまらず、非人間化をもたらす諸々の状況に抗して、痛む人々と共に痛みつつ、社会における意味の形成と希望の醸成に積極的に寄与することができる教会教職者が求められている。

### ②社会と教会のグローバル化と多様化

21世紀のグローバル化する世界にあって、諸文化や諸宗教が不均衡な関係において併存する中、キリスト教も世界大で展開しており、多様な言語や文化を反映するものとなっている。日本においても、多様な民族・文化・言語・習慣を持つ人々が増加する中で、互いへの思いやりをもって共存できる社会の形成が求められている。教会は、そのような地域社会の形成に寄与する働きの一端を担うが、教会教職者には、異文化理解の精神をもって教会の国際化と多様化に対応し、他者との共存・協力を可能にする高い資質が求められている。

### ③少子高齢化社会

日本では少子高齢化が進み、産業構造の変化や富の分配における格差が拡大する中で、社会と教会が直面する課題が複雑化している。特に、教会の構成員の高齢化は、教会の将来にとって重要な課題となっている。そのような中で、教会を形成してゆくためには、社会と教会における高齢化がもたらす諸課題に取り組む必要がある。殊に、キリスト教は社会福祉の実践に深く関わってきた歴史がある。戦後はその貢献が後退したという指摘があるが、教会が直接的に、またNPO/NGO等の働きを通して間接的に、高齢者の

福祉に関わる実践が徐々に始めている。社会の安寧と福祉の実現のために貢献するキリスト者を整えるために、教会教職者には良き理解力と優れた指導力が求められている。

#### ④競争社会

今日の「知識基盤社会」は、一方で、激しい競争原理が優先される社会と重なっていて、多くの人々が傷つき、そこからはじき出された人々は強い疎外感を覚えている。教会では、心に傷を負った人々への対応やその家族へのサポートの必要性が増大している。さらに、教会またはキリスト教 NGO/NPO 等として、不登校児を受け入れる教育プログラム、精神疾患に苦しむ人々と家族へのケアや作業所の運営、自死願望者の救済活動等に取り組むケースが増えている。教会教職者は宗教人として、社会奉仕活動の精神を理解し、それらの分野の専門家を支援し協力することで人々の尊厳の回復に寄与することが、その指導力の一環として求められている。

上述のような状況の中に生きる人々に対する深い理解をもって教会を形成し、教会の社会に対する奉仕の実践を推し進めるためには、神学に関する高度な専門知識と研究能力に加え、論理的説明能力、他者との協働による問題解決能力を身に付け、キリスト教精神に基づいて社会貢献のできる高度専門職業人としての教会教職者が必要とされている。

### 3. 人材養成の目指す方向と教育理念

本研究科における人材養成は、プロテスタント・キリスト教の精神に立って、旧約・新約聖書に基づく高度で体系的な神学上の学識、深い霊性と高い倫理性、論理的説明能力、他者との協働による問題解決能力を身につけ、複雑な様相を呈する現代社会に生きる人々に対する深い理解をもって教会を形成し、より良き市民社会の実現のために貢献できる高度専門職業人としての教会教職者を養成することを主要な目的とする。また、将来、本学または他の神学教育機関において神学の教育・研究に携わる神学研究者・教育者の養成もその目的に加えるものである。

上記の人材養成の目的を達成するために、教育理念を以下のように具体化して教育を行う。

a. 旧約・新約聖書をその原語であるヘブライ語及びギリシア語において、学際的方法論を用いて解釈し、キリスト教の伝統に照らし合わせつつ、現代の状況に適用し、またそれを説得的に提示する能力を涵養すること。これは価値観の急激な変化と多様化の中で、

- 歴史の吟味を経た古典としての聖書とその解釈と適用の歴史から真正な知恵を学び、その今日の意味を導きだし、それを人々に納得できるよう提示するために必要なことである。
- b. 神学の諸科から得られる専門的知識について学際的に分析・統合し、今日の日本と世界における神学と教会のあり方を創造的・建設的に構築することのできる能力を涵養すること。これは今日の複雑な社会に生きる人々に対し、歴史的に蓄積された神学と世界大に展開するキリスト教の歴史の遺産から学び、生きる意味と希望を提供することを目的とするものである。
  - c. グローバル化する日本と世界におけるキリスト教会の現状を知り、隣人愛とディアコニア（奉仕）の精神をもって、異文化を理解し、他者との協働により、忍耐強く、和解と平和を世界にもたらすための働きに参与する能力を涵養すること。
  - d. 教会の営みにとって重要な礼拝、説教、礼典等について、キリスト教会の諸伝統に照らした深い理解をもって、それらを実践するための技量を養成すること。
  - e. キリスト教人間論に基づく人間への深い洞察力をもって、人々の苦しみを理解し、他者のために生きることで自らも向上する、魂への配慮をすることのできる力を涵養すること。これは、今日の高度な競争社会に見られる成果主義によらず、社会の痛みに関わり、教会の形成と社会の安寧の実現のための働きを可能にするためである。
  - f. 深い霊性と高い倫理性は、教会教職者として教会に仕え、あるいは神学の教育や研究に携わり、よき市民社会の実現に貢献するためには不可欠な素養であるが、それらが本研究科における授業、研究活動全般を通して、また、寮における共同生活全体を通して涵養されるよう配慮する。

#### 4. 組織として研究対象とする中心的な学問分野

本研究科は、神学部のみで単一学部大学である本学が設置する大学院であり、研究対象となる中心的な学問分野は「神学」である。

本学は神学部の中に、①「聖書学」、「組織神学・歴史神学」、「実践神学・宣教学」と区分される神学の諸専門科目を提供する「神学科」と、②異文化理解と国際支援に焦点を当てた世界のキリスト教に関する課程、及び社会福祉におけるリーダーの養成を主眼とする介護福祉士養成課程を包摂する「国際キリスト教福祉学科」を設置し、幅広い神学教育を行っている。同時に、建学の精神の一つに「実践的神学教育」を掲げ、今日社会における適用可能性に配慮した神学教育を提供してきた。

本研究科では、単に神学部神学科の延長に留まらず、神学部におけるその幅広い教育研究に呼応する「神学」を中心的な研究対象とするものである。また、その研究対象分野

を、「聖書学」領域と「神学・教会」領域とに分けて研究を行う。

(1)「聖書学」領域は、聖書学（旧約聖書学と新約聖書学）を強調してきた本学の伝統を受け継ぎ、キリスト教の正典である旧約・新約聖書の使信（教え）を、その原語であるヘブライ語とギリシア語を用いて各書が書かれた歴史的コンテクスト（文化脈）において理解するとともに、教会の伝統との対話を通して新たに解釈し、その今日的意味を問う研究を行う。

(2)「神学・教会」領域は、神学部において「組織神学・歴史神学」及び「実践神学・宣教学（キリスト教哲学）」として提供される諸分野を包括・統合し、それを発展させることで、今日の国際化し複雑化する教会と社会の必要に応えるために、高度な神学研究を行い、それを教会における実践（ミニストリー）へと結びつけることを意図している。特に、本領域では、これらの神学の諸分野を横断する総合的な研究を主とするとともに、それに加えて、幅広く、現代社会に生きる人々や国際化する社会における教会の役割等について研究するため、神学部国際キリスト教福祉学科で行われている公共福祉とキリスト教の世界的発展に関する研究を発展・深化させるという側面がある。

## 5. 既設の専修学校の改廃計画と新入生受け入れの方策

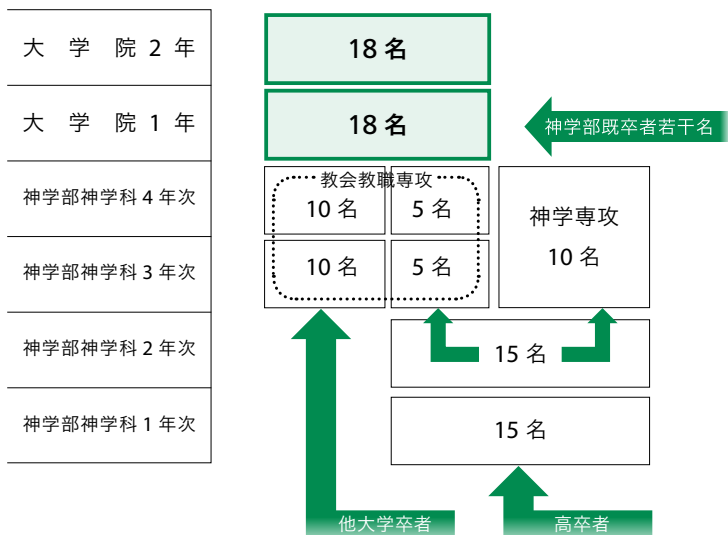
本学の設置者である学校法人東京キリスト教学園は、専修学校である東京基督神学校を設置し、大学卒業者を対象に専門職業人教育を行ってきた（神学専門課程神学科：教職コース [3年制] 入学定員15名・共立研修コース [2年制] 入学定員5名、神学専門課程音楽科：[3年制] 入学定員5名）。しかし、激変する社会の中で教会の働きに従事するためには、さらに充実した教育課程の必要が叫ばれていた。特に、健全な対人関係の構築に加え、複雑な課題への対応能力や精神的弾力性の涵養が必要であることが指摘されている。

今回の計画は、東京基督神学校を廃止し、本学における教育研究を発展・深化させる形で、高度専門職業人を養成する大学院修士課程を新設するものである。なお、東京基督神学校は、平成21年度（2009年度）入学生を最後に、既に学生募集を停止しており、現在の在学生在が卒業次第（平成24年（2012年）3月に卒業予定）廃止する予定である。平成22年度（2010年度）以降、従来では東京基督神学校で受け入れて来た大学卒業者を、本学神学部神学科3年次に編入学させている。神学科には、教会教職者の養成のための総合的な学びを行う「教会教職専攻」及び分野に特化した学びを行う「神学専攻」を設置しており、当該3年次編入者は「教会教職専攻」の所属である。「教会教職専攻」では、



大学院入学前教育として、ギリシア語、ヘブライ語及び神学の専門基礎教育(異文化理解・国際関係と社会福祉科目を含む)を提供している。神学科に入学した者のうち、大学院入学を希望する者については、学部3年次から「教会教職専攻」において編入学生と共に学ぶ形態としている。「教会教職専攻」での神学の専門基礎教育を終了した者のうち、志願者に入学選考を実施し、本研究科での神学の専門教育を行なうものである。このような学部と研究科での一貫性のある発展的教育課程を提供する形態は、日本においては、神学部を有する他大学においても実施されている。

〈参考図：神学部神学科教会教職専攻と大学院神学研究科の学生受け入れ図〉



## 6. 入学予定者と修了予定者の進路に関する分析

### (1) 東京基督教大学及び東京基督神学校における実績

今回の計画は、従来は東京基督神学校で受け入れていた大学卒業者を、本学神学部神学科教会教職専攻3年次に編入させ、卒業後引き続き大学院において学びを継続させる、というものである。それゆえ、本研究科の入学予定者と修了予定者の進路に関しては、神学部及び東京基督神学校における実績が重要な目安となる。



## ①学生募集の実績と本研究科の入学定員

(A) 過去5年間の神学校（3年間）・本学教会教職専攻（2年間）の平均入学者数  
東京基督神学校の入学者と本学神学科教会教職専攻の在籍者を合わせた過去5年間の平均は、**17.8名**である【参考資料②a：東京基督神学校の入学者の状況】【参考資料②b：神学部神学科教会教職専攻の在籍者数】。この実績が、大学院の入学定員を定める際の重要な目安となる。

(B) 本研究科入学希望者数および入学者数見込

「I 設置の趣旨及び必要性／5. 既設の専修学校の改廃計画と新入生受け入れの方策」(P.6)でも説明した通り、本学は平成22年度（2010年度）より、神学部神学科教会教職専攻を設置しているが、同専攻在籍者は、本研究科を含めた4年間で学びを完成させることを前提に同専攻に3年次編入するか、1年次入学後本研究科への進学を目指して同専攻を選択した学生たちであり、原則として本研究科への入学を希望することが見込まれる。

同専攻在籍者を含めて行った、本学学生に対する大学院研究科設置に関するアンケート結果によれば、総計で4年次生の**15名**（平成24年度[2012年度]本研究科入学見込）、3年次生（平成25年度[2013年度]本研究科入学見込）の**21名**が計画中の研究科に入学を希望している。また、現在の2年次生のうち9名が本研究科への入学を希望しているが、これに平成24年度（2012年度）編入学生（定員）10名を加えての**19名**が、平成26年度（2014年度）に本研究科への入学を希望すると見込まれる。以上、本研究科開設後3年間の学内からの入学希望者平均は**18.3名**である【参考資料②c：大学院研究科設置に関するアンケート調査結果】【参考資料②d：大学院研究科設置に関するアンケート】。

(C) 本学既卒者からの入学見込み

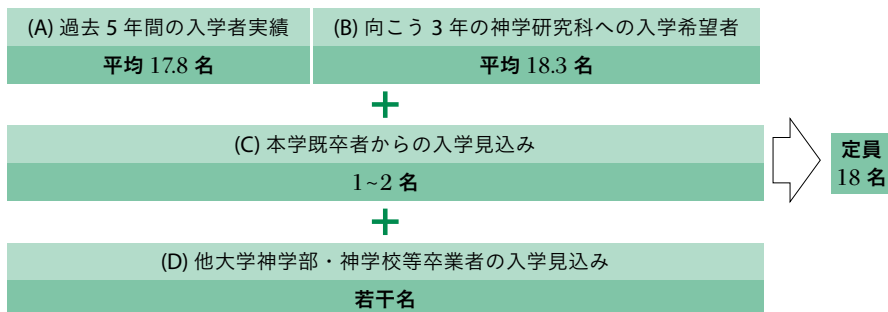
従来、本学卒業後、何年間かの社会経験を経てから、東京基督神学校に入学した者も過去5年間（平成23年度[2011年度]を含まない）の平均で**1.6名**いた【参考資料③：東京基督教大学卒業数年後に東京基督神学校に入学した者の数】。それゆえ、本学既卒者の中にも本研究科入学希望者を**1～2名**見込むことができる。

(D) 他大学神学部・神学校等卒業者の入学見込み

従来、他の大学神学部・神学校等卒業後、実務経験を経た後、学びの深化や継続教育を

求めて東京基督神学校に入学した者もいた。本研究科設置後、そのような者からも入学希望者を若干名見込むことができる。

以上、(A) 過去5年間の入学者実績（神学校入学者・本学教会教職専攻編入学者の平均）**17.8名**、(B) 入学希望者数15～21名（平均**18.3名**）、(C) 本学既卒者からの入学見込み（**1～2名**）、(D) 他大学神学部・神学校等卒業者の入学見込み（若干名）を考慮に入れ、定員充足を十分見込むことができることを前提に、**入学定員を18名**とする。



#### 大学院の志願者見込み数

	H24 年度 (2012 年度)	H25 年度 (2013 年度)	H26 年度 (2014 年度)
(B)	15	21	19
(C)+(D)	4	4	4
志願者見込み	19	25	23

#### ②卒業生の進路に関する実績

本学及び東京基督神学校、並びにそれぞれの前身校の卒業生総数約 2,000 名のうち、現在約 600 名が教会教職者として国内外で働いている。

過去5年間の卒業生のうち、本学神学部神学科卒では年平均 5.4 名（神学科卒業者に占める割合：26.7 パーセント）、東京基督神学校卒では年平均 14.2 名（卒業者に占める割合：85.5 パーセント）が、教会教職者としての働きに就いている【参考資料④：東京基督教大学神学部神学科及び東京基督神学校卒業者の「教会教職者」の割合】。この他にも、他の神学校に入学した者もあり、広くキリスト教宣教の働きを担っている。全体として、教会教職を希望した卒業生の就職先は十分に確保されている。

#### (2) 支援教派・教団との関係及びそこからの期待

本学は、プロテスタント・キリスト教の諸教会から教派・教団の違いを越えて学生を受

け入れている。特に、本学と結びつきの深い9つの教派・教団（カンバーランド長老キリスト教会日本中会、基督聖協団、日本聖約キリスト教団、日本長老教会、日本同盟基督教団、日本バプテスト教会連合、日本福音キリスト教会連合、日本福音自由教会協議会、日本メノナイト・キリスト教会会議）は「支援教派・教団」として学校法人東京キリスト教学園に理事や評議員を派遣しており、本学及び東京基督神学校の卒業生の多くが、これらの団体の教会教職者として活躍している。支援教派・教団の教会教職者のうち、日本同盟基督教団や日本長老教会の教会教職者の本学園出身者の割合は約70パーセント、カンバーランド長老キリスト教会日本中会では53パーセントと特に高い【参考資料⑤：支援教派・教団教職者のうち本学園卒業者の割合】。これらの支援教派・教団からは、別添の通り、本学における大学院設置の趣旨への賛同と教会教職者養成の深化への期待、及び今後も学生を送る旨の要望書が寄せられている【参考資料⑥：支援教派・教団等からの大学院設置要望書】。

その他にも、日本基督教団、日本キリスト改革派教会、日本キリスト教会、日本バプテスト連盟、沖縄バプテスト連盟、保守バプテスト同盟、アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団、イムマヌエル綜合伝道団、大韓イエス教長老会、在日大韓基督教教会等、多くの教派・教団において、それぞれ少数ではあるが本学園の卒業生が教会教職者として働いている。

(1) 及び (2) の分析結果から、本研究科への入学予定者と修了予定者の進路は十分に確保される見通しである。

---

## II 修士課程までの構想か、又は、博士課程の設置を目指した構想か

今回は、修士課程である神学研究科神学専攻の設置を目的とする。ただし、将来的には博士課程の設置も念頭に置いている。

---

## III 研究科、専攻等の名称及び学位の名称

### 1. 名称、及び当該名称とする理由

本学大学院の名称は、東京基督教大学大学院神学研究科神学専攻とする。

本研究科及び本専攻は、伝統的な学問分野である「神学」を今日の世界と社会の中で意味のある学問として教育研究することを通して、高度専門職業人である教会教職者、及び神学研究者・教育者の養成を目指すものである。ゆえに、研究科及び専攻の名称を「神学研究科」「神学専攻」とする。

## 2. 学位に付記する専攻分野の名称

本研究科は、本学神学部を基礎とし、今日的適用性を追求する学問としての神学を教育研究分野としているため、学位に付記する専攻分野は「神学」とする。学位名は、「修士(神学)」とする。

## 3. 英訳名称

本研究科の教育課程は、その内容においても、目指すところにおいても国際的に通用する神学の修士号であるため、以下のような英訳名とする。

研究科名称（英訳）

Graduate School of Theology

専攻名称（英訳）

Division of Theological Studies

学位名称（英訳）

Master of Arts in Theology（略称：M.A. in Theology）

---

## IV 教育課程の編成の考え方及び特色

### 1. 教育課程編成の説明

本研究科では、上記の教育理念及び人材養成の目的達成のために、以下のカリキュラムポリシーによって、神学知識の実践的応用力を涵養することを視野に入れた体系的で一貫性のある教育課程を導入し、研究指導を実施する。これは、中央教育審議会答申「新時代の大学院教育」における「課程制大学院制度に沿った教育の課程と研究指導の確立」を目指すものであると同時に、「高度専門職業人の養成に必要な教育」についてなされた「理論的知識や能力を基礎として、実務にそれらを応用する能力が身に付く体系的な

教育課程が求められる。」との提言に沿うものである。

### 〔カリキュラムポリシー〕

- a. 研究科神学専攻のもと、「聖書学」領域と「神学・教会」領域を設置し、両領域から必修科目・選択科目をバランスよく配置することにより、神学に関する高度で体系的な実践的知識を身につけさせることを目的とする。
- b. 「基幹科目」群による体系的な神学理解に基づき、学生が選択した分野について修士論文を書き上げるために、高度な専門知識と研究能力を深めることのできる専門科目群を設置する。
- c. 研究指導の一環として初年度第1学期に、神学研究の基礎を全学生に教授し、研究分野に焦点を絞る前の、総合的な神学研究への導入を行う。また、最終年度第2学期に全学生を対象に神学に関する総合演習を行い、今日的課題について神学の学識を統合する学際的な共同研究を行う。
- d. 「神学・教会」領域の実践的適用性を重視する諸科目と合わせて、説教と実践神学に関する演習科目において、神学の専門知識を実践に応用する能力及び教会教職者としての倫理性の涵養を目指す。

上記のカリキュラムポリシーを実現するために、本研究科の教育課程は神学部における専門基礎教育を発展・深化させるものとなるよう配慮する【参考資料⑦：神学部と神学研究科の教育課程の連続性と発展性】。

また、以下のガイドラインに沿って、教育課程を編成するものとする。

#### (1) 「基幹科目」群・「専門科目」群

神学研究の総合的な素養を涵養するために、「聖書学」領域・「神学・教会」領域の主要科目及び「神学研究の基礎」で構成する必修の「基幹科目」群を設ける。また、修士論文の研究に繋げるために、各領域の他の科目及び「説教演習Ⅰ／Ⅱ」「実践神学演習Ⅰ／Ⅱ」で構成する「専門科目」群を設ける。

#### (2) 履修順序

「基幹科目」群の提供は第1年次に行い、「専門科目」群の履修順序に関しては、科目ナンバリングと先修科目を設定することで、段階的・発展的科目履修を図る【参考資料⑧：基幹科目・専門科目と科目コードについて】。

## 2. 学生の目的に応じた2コース

本研究科は、養成する人材像に基づき以下の2つのコースを設定する。

### (1) 教会教職者コース

神学に関する高度な専門知識と実践力を幅広く持つ教会教職者を養成するため、「聖書学」「神学・教会」の各領域及び「研究・演習」から広範に科目を履修する。

### (2) 神学研究者・教育者コース

神学研究者・教育者を養成するため、深遠な学識と研究能力を身につけさせることを目指す。学生は、「聖書学」領域か「神学・教会」領域のどちらかの領域において、専攻する分野を絞って研鑽する。

人材養成の目標に2側面があるため、上記2コースを設定するが、専攻による区分は行わない。その理由は、入学する大多数が高度専門職業人としての教会教職者を目指す学生であり、神学研究者・教育者を目指す学生は若干名であると推測されるからである。その根拠としては、(a) 本研究科の人材養成の目的が教会教職者の養成を主要なものとする、(b) また、東京基督神学校では、神学研究者・教育者を希望する者がごく少数ながら存在したこと、が挙げられる。

## 3. 研究領域とカリキュラムの説明

上記のカリキュラムポリシーのもと、「聖書学」「神学・教会」両領域、及び「研究・演習」からなる系統だったカリキュラムで教育を行う。

### (1) 「聖書学」領域

「聖書学」領域では、「源泉に立ち返る」というプロテスタント・キリスト教の伝統に立ち、旧約・新約聖書の原語である古典ヘブライ語及びヘレニズム期ギリシア語の文法と講読力に基づき、その本来の意味を所与の文化脈において総合的に解釈し、今日の意味を洞察するための技量の習得を目指す。聖書の使信(教え)の今日的意味を理解する際には、(a) 旧約・新約聖書と合わせて歴史性をもって展開する聖書神学的視点、(b) 聖書テキストの地平と今日の解釈者の地平との呼応的対話の中でなされる異文化理解の視点、(c) 神学の伝統をも考慮に入れた解釈学的視点、が必要となる。このような能力を修得する中で、聖書の使信を今日にダイナミックに伝え、教会教職者、及び神学研究者・教育者

にとって必要な分析力と統合力が涵養されることを目指す。旧約・新約聖書に含まれる多様な文書に関わる、言語、歴史、文化、文学、思想、宗教、社会等の諸側面に焦点を当てる必要があることから、学問的アプローチは学際的である。

導入として、「旧約・新約聖書緒論」（必修科目）では、本文研究・正典論・文学類型等を、「聖書解釈学」（必修科目）では、聖書の今日的意味の考察に必要な解釈の理論的な枠組みを考究する。これら必修科目の学びの上に、旧約聖書学では「五書研究」「預言書研究」「聖文書研究」「歴史書研究」、新約聖書学では「新約聖書とその世界」「福音書研究」「パウロ研究」「新約聖書神学」の各科目について、より綿密で専門的な学識の修得と研究能力の涵養を図る。

## (2) 「神学・教会」領域

「神学・教会」領域は、本学神学部の伝統と専門性の上に立って、幅広い視野から、現代社会におけるキリスト教と教会の現状とその働きを深く理解し、今後のキリスト教と教会のあり方について研鑽を積む機会を学生に提供する。本領域は、神学部神学科における「組織神学・歴史神学」「実践神学・宣教学」の各分野にキリスト教哲学を加えて統合・発展させ、教会と神学の歴史的展開とその背景に対する深い洞察をもって今日の課題を歴史的・体系的に理解し、その理解を教会の働き（ミニストリー）へと結びつけるための論理的洞察力を養うことを目的とする。神学が教会の実践に仕え、社会にとっても意味のあるものとなるために、学際的な方法論によって神学の実践性を論理的に考察する研究領域である。

「近現代のプロテスタント神学」（必修科目）では、組織神学・歴史神学の方法論を用いて、今日に特徴的な言語、概念、思考様式に呼応して表現される多様な神学のあり方について考察する。「教会とミニストリー」（必修科目）は、神学実践の目標や今日的な課題、また社会に開かれた共同体としての教会の意義について考察するとともに、教会教職者としての倫理性を養う。

その他、「日本キリスト教史」「宗教多元社会と公共哲学」「現代キリスト教の世界的展開」「宗教改革史」「日本の諸宗教とキリスト教」の5科目を通して、今日のキリスト教と教会に対する歴史的、哲学的、神学的な考察力を養うとともに、他の諸宗教に対する理解や異文化理解に基づき日本や世界で神学を実践する際の諸課題への対応力を養う。また、「宗教教育学」「宗教心の発達」「キリスト教公共福祉」「教会と法律」の4科目を通して、教育、心理、福祉、法律を軸に、社会におけるキリスト教の役割の理解、また教会の運営についての理解を深める。

### (3) 研究・演習

「聖書学」領域、「神学・教会」領域の他、神学研究のための総合的かつ体系的な学識の形成とその実践への応用を可能にする能力の涵養を図るための科目を設ける。

1年次春学期の「神学研究の基礎」（必修科目）では、神学の主要分野について総合的な研究基礎能力の涵養を図るために、神学上の諸方法論を導入する。それに続く「研究指導」（必修科目）では、各担当の指導教員が、理論と実践の集大成としての修士論文作成の指導をする。また、2年次秋学期に、神学の諸分野における研鑽の統合のために「神学総合演習」（必修科目）を行い、今日における神学上の諸課題について多角的な視点から討論する。

主に教会教職者を目指す者に「説教演習」を提供し、教会教職者に求められる深い人間理解を反映した、聖書の解釈力・修辭的表現能力の伸張を図る。さらに、「実践神学演習」によって、学生の教会経験に基づき、神学上の学識を応用する際の諸問題について考察することで、教会教職に関する理解を深め、実践的応用力を涵養する。なお、この両演習科目については、将来神学研究者・教育者を目指す学生にとっても、学術の実践的適用について学ぶ貴重な機会となるため、履修を勧めることとする。

## 4. カリキュラム外のプログラム

以上の正課のカリキュラムに加えて、教会教職者及び神学研究者・教育者に求められる深い霊性の涵養と品格の練達のために、本学では以下のプログラムをカリキュラム外で実施する。

- a. 学生生活、特に寮生活を通して、キリスト者としての霊性の涵養に加え、自主性や協調性、また、倫理性や奉仕の精神等、教会教職者に必要な資質としての品格を養う。
- b. 国内外の研究者・実務家による神学とその実践に関する講演会や研究会議を開催する。

---

## V 教員組織の編成の考え方及び特色

### 1. 教員組織編成の理念

カリキュラムの目的を達成するため、主要となる研究領域について高度な研究能力と教授力のある専任教員（研究指導教員）を配置する。また、高度専門職業人教育に必要な



実践応用能力を涵養する科目のために、実務経験の豊富な教員1名を専任教員の中を含むよう配置する。さらに、カリキュラムに多様性を持たせるために、必要数の兼任教員及び兼任教員を配置する。

## 2. 教員組織編成の特色

### (1) 教員の専門分野・学位等

上記理念に基づき、本研究科の二領域について4名ずつの専任教員、計8名を配置し、カリキュラム上重要な科目だけでなく、大多数の科目を専任の教員が担当することとした。8名の教員の専門分野は、聖書学4名（旧約聖書学2、新約聖書学2）、神学・教会4名（歴史神学・組織神学1、キリスト教哲学1、実践神学1、実践神学・歴史神学〔日本キリスト教史〕1）である。最終学位については、8名中7名が博士号取得者である（1名は修士）。

本研究科の専任教員（7名は教授、1名は准教授）は、平均教授歴は19年であり、研究教育目標を達成するのに十分な資質を備えている。1名は東京基督神学校の教員（校長）を8年間務め、その廃校（平成23年度〔2011年度〕末に予定）に伴い、今春（平成23年度〔2011年度〕）より本学教授となっている。

また、専任教員全員が神学部との兼担であり、研究科における専門教育を神学部における専門基礎課程の上に発展的に連続させる上で、大変重要であると判断している。

なお、カリキュラムの多様性のために、4科目を兼任教員4名及び兼任教員2名（博士号取得者4名、修士号取得者2名）で担当する。

### (2) 専門的職業人養成における実務経験者

本研究科は、高度専門職業人である教会教職者の養成を主要な目的とするものであり、「教会とミニストリー」「実践神学演習」「説教演習」はその目的達成のための重要科目である。これらの科目を担当する者には、教会における実務の経験が不可欠である。担当者は、教会教職者として26年間の実務経験にとどまらず、本学及び東京基督神学校において関連科目の教授経験が8年あり、実務経験を教育研究に反映させてきた十分な経歴がある。

実務経験者1名以外に、専任教員のなかには教会教職者としての経験を有する者が4名おり、神学の各分野と実践との関わりについて高い識見を有している。

### (3) 教員の年齢構成

完成年度の専任教員の年齢構成（平成 26 年 [2014 年] 3 月 31 日現在）は、60 歳代 3 名、50 歳代 4 名、40 歳代 1 名で、平均年齢は 57.6 歳、最高齢は 69 歳である。研究者及び教育者として成熟した時期である 50 代の教員が中心となっている。なお、本学の教員の定年は 63 歳であるが【参考資料⑨：就業規則〈抜粋〉】、その後も教員人事委員会で議した後、教授会での承認を経て、専任である特任教員または特別教授として 70 歳まで在職することができる【参考資料⑩ a:特任教員規程】【参考資料⑩ b:特別教授規程】。

### 3. 教員の負担の程度

専任教員は、神学部と兼担で授業を担当する。年間の担当科目数は、大学院 3～7 科目（研究指導を含む）、学部 4～7 科目、合計は平均で約 10 科目（最少：7 科目、最多：11 科目）となり、本学が定める教員の授業負担の限度を下回っている。

---

## VI 教育方法、履修指導、研究指導の方法及び修了要件

### 1. 教員方法

本研究科の教育方法には以下の特徴がある。

#### (1) トライメスター（3 学期）制

集中して効果的な研究教育を実現するために、10 週間を 1 学期とするトライメスター制を実施する。また 1 コマを 10 分間の休憩を挟んだ実質 140 分とすることで、演習及び演習形式を含む授業の充実を図る。

#### (2) 講義と演習を組み合わせた授業形態

創造的で論理的に考える力を養い、また説得力のある発言力の涵養、共同研究による協働する力を育成するため、多くの授業で、講義形式と演習形式を併用した授業形態により教育を行う。

#### (3) 漸進的科目履修を可能とする教育課程制度

各科目に履修の目安となるナンバリングと、先行して履修すべき先修科目を設定することにより、漸進的な科目履修と学術修得の便宜を図る【参考資料⑧】。

## 2. 履修指導の方法

- a. 履修指導の体制は、研究科委員長及び専攻主任（大学院専任教員）の主導のもと、入学年次の冒頭に学生を対象としたオリエンテーションを行い、修士論文の指導教員に相談させた上、専攻主任が履修計画を確定する。
- b. 講義科目（講義に重きを置く科目も同様）は1学期10コマ（1コマ140分）2単位、演習科目は1学期10コマ（1コマ140分）1単位とし、「研究指導」は2年間を通じて履修し、4単位とする。
- c. 各科目及び研究指導に関する評価は、A+（100-90点）、A（89-80点）、B（79-70点）、C（69-60点）の4段階評価とし、F（59点以下）評価は不可とする。

## 3. 研究指導の方法と修士論文

### （1）研究指導の体制及び修士論文審査に至るスケジュール

「研究指導」（4単位）は、修士論文の作成指導を中心とし、担当教員が指導教員となり、修士論文作成スケジュールに則って、2年間にわたり継続して指導する【参考資料①：修士論文作成スケジュール】。

入学試験出願時に提出された研究テーマ希望書に基づき、1年次開始時に研究領域（分野）の選択を専攻主任の指導のもとに行う。研究科委員会の承認に基づき指導教員及び指導補助教員を決定し、両者との協力体制のもと研究指導にあたる。研究課題の設定と、指導教員の変更は、1年次秋学期開始まで認める。1年次の1月上旬までに、指導教員の指導のもと、研究計画書を作成し、修士論文の仮題を添えて提出する。

2年次には、定期的に開かれる「研究指導」において修士論文作成の進捗を確認するとともに、秋学期には、修士論文中間発表会を開催し、研究指導教員全員による指導を行う。2年次冬学期開始時に学生は、修士論文の初稿と概要を、指導教員の承諾書を添えて提出する。それを受けて、研究科委員長は専攻主任と相談の上、研究指導教員の他に各修士論文の主査・副査を任命し、学位論文審査委員会を発足させる。修士論文の提出期日は、最終学年次の1月第3週火曜日とする。学位論文審査委員会は提出された修士論文を査読し、論文発表会を経て、2月中旬に修士論文の口頭による最終試験を実施する。修士論文審査及び最終試験は、別に定める実施細則に基づき実施する【参考資料⑫：学位論文審査及び最終試験実施細則】。実施にあたっては、別紙チェックシートを用いて評価を行うことにより、厳格性及び透明性に十分に配慮する【参考資料⑬：修士論文最終試験審査チェックシート】。

最終試験終了後、学位論文審査委員会の主査は、副査及び研究指導教員と共に、審査のまとめを公平さに留意して行い、審査報告書を研究科委員長に提出する。審査報告書に基づいて、研究科委員会で審議をし、修士論文の可否判定を行う。

## (2) 修士論文の到達目標

修士論文が以下の点を達成したものになることを目標に、指導教員は、定期的に研究活動の報告を受け研究指導を行う。

- a. 論文の形式と内容において当該研究分野の学問的水準に達している。
- b. 当該の研究の背景・結果・将来性についての知見が示されている。
- c. アプローチやデータの取り扱いにおいて独自性が見られる。
- d. 神学的・教会的・社会的に意義のある研究である。
- e. 論旨の論理的展開が明瞭であり、一貫性がある。
- f. 批判的な分析と建設的な統合がなされている。
- g. 研究に関する高い倫理性を反映している。

## (3) 修士論文の公表方法等

修士論文の公表については、製本した修士論文を本学図書館で閲覧に供すると同時に、本学ホームページ上に論文題目及び要旨を公開する。

## 4. ディプロマポリシーと修了要件

- a. 今日の教会と世界が直面する神学的諸課題について、旧約・新約聖書の原語による解釈とそこから導き出せる原則に基づき、キリスト教の豊かな伝統と今日の状況に照らして分析・統合し、現代に対して意味のある神学を創造的に営む能力。
- b. 自らの知見を、他者に説得力をもって伝達するための論理構築をし、表現する能力。
- c. 現代の教会と社会において直面する多様な事態に、高い倫理性と品格をもって取組み、問題解決のために提言するだけでなく、他者を理解し協働する能力。

上記に掲げる能力及び専門知識と研究能力を身につけ、2年以上の在学と所定の30単位以上を履修し、修士論文の審査及び最終試験に合格した者に、「修士（神学）」の学位を授与する。2つのコースの修了要件は、それぞれの履修モデルに基づき、以下の通りとする。

教会教職者コース	42 単位以上
神学研究者・教育者コース	30 単位以上

【参考資料⑭ a：コース別の修得すべき単位数】 【参考資料⑭ b：履修モデル】

## 5. 履修科目の年間登録上限、他大学院における授業科目の履修等

年間登録上限単位数は、29 単位とする。国内外の他大学院における単位互換や単位認定等の上限は、修了要件単位数 30 単位のうち選択科目を中心として 10 単位未満とする。必修科目は、極力本研究科で提供する科目を履修するよう指導する。

## 6. 研究の倫理審査体制の具体的内容等

本学は、研究上の倫理基準として「研究活動ガイドライン」、及び特に人を対象とする研究のための『人を対象とする研究』倫理規準」を定めている【参考資料⑮ a：研究活動ガイドライン】 【参考資料⑮ b：「人を対象とする研究」倫理規準】 【参考資料⑮ c：研究倫理委員会規程】。本学で研究活動をする全ての者に上記規準を遵守させるため、研究倫理委員会を設置し、同委員会は本学で行われる研究活動の倫理に関わる事項について審議、調査、推進を行っている。

同委員会は全学組織であるが、構成員として研究科委員長が加わる。研究科の指導教員も、ガイドライン・倫理規準を遵守し、また、それに基づく研究指導を行う。研究科委員長は、各研究指導教員を指導・監督する責任を負う。

本研究科において学生が作成する修士論文に関する倫理審査は、研究科委員会が責任を持ち、具体的には各指導教員を通じて指導を行い、指導教員を含む専任教員 3 名からなる学位論文審査委員会において審査する。特に人を対象とする研究を行う者は、研究倫理委員会に研究計画を提出する。同委員会は上記ガイドライン・倫理規準に基づく審査を行い、審査結果を通知する。学生は、研究の終了後、研究活動報告書を同委員会に提出する。

## VII 施設・設備等の整備計画

### 1. 校地、運動場の整備計画

本学キャンパスは、千葉県北総地域の自然環境の豊かな地に位置しており、原則全寮制

の教育環境の中、学生はキャンパス内の寮に住み、将来教会教職者となるための集中した研鑽を積み、人格的陶冶を受ける環境としてふさわしい立地であるといえる。また千葉ニュータウン地域の一角に位置し、大規模な商業施設も近隣にあり、鉄道にて都心及び成田国際空港とも直結するなど、生活の便もよい地域である。

本学の校地面積は、現在 52,042.44㎡（校舎・運動場敷地）であり、大学院設置後の収容定員 196 名に対しても、設置基準を十分に満たしている。なお、大学院設置の際には、現在東京基督神学校用地の 6,884㎡も大学用地に編入し、合計は 58,926.44㎡となる。

## 2. 校舎等設備の整備計画整備計画

本学の校舎面積は、現在 5,520.22㎡であり、単一学部大学として、設置基準を十分に満たしている。大学院設置の際には、現在東京基督神学校校舎である 728.62㎡についても大学校舎に編入し、合計は 6,248.84㎡となる。

現在の東京基督神学校校舎編入後の講義室数は 14、演習室数は 5 であり、うち 4 室（講義室 2、演習室 2、合計 190.8㎡）が大学院専用となる【参考資料⑯：教育施設一覧】。大学院の授業は、完成年度において 1 週間あたり最大 14 科目（講義 8 科目、演習 6 科目。【参考資料⑰：予定時間割】）を計画しており、同時開講科目数は 2 科目以下であり十分な教室数が確保されている。「研究指導」は、大学院講義室（2）・演習室（5）の他、専任教員に与えられている研究室を用いて行う。

学生用の研究室として、大学院棟（現在の神学校棟。大学院設置に当たって大学校舎に転用予定）内に学生研究室 A（57.6㎡）、学生研究室 B（39.6㎡）の 2 部屋、合計 40 名分（収容定員 36 名）の研究スペースを用意する。同室内には机、椅子、本棚、ロッカー、インターネット接続設備等を設置し、大学院生の学習の便宜を図る【参考資料⑱：学生研究室見取り図】。

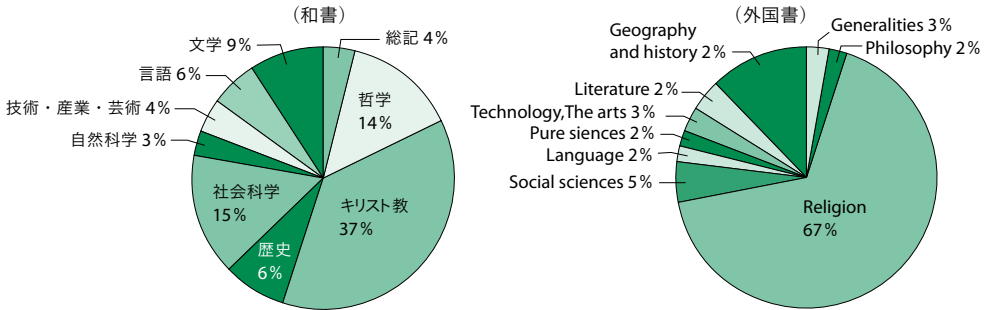
学生の休息施設として、学生食堂、チャペル、運動場、天然芝の中庭等を備えている。また、学生の居住施設として、男・女独身寮、家族寮を用意している。独身寮室は、学習机・本棚等を備えた 1 人部屋または 2 人部屋であり、別に自習室として男女各 2 室がある。また、すべての寮にはインターネット接続設備を整備している。

なお、大学院棟及び大学院専用の講義室、演習室、学生研究室以外の施設は、大学学部との共用となるが、大学院の収容定員から見て十分なゆとりがある。

### 3. 図書等の資料及び図書館の整備計画

本学附属図書館の蔵書点数は 91,393 点（和書 58,684、外国書 32,709）、専門雑誌点数は 834 タイトル（和 627、外国 207）（いずれも平成 22 年度 [2010 年度] 末現在）で、神学系の図書館として質量ともに充足している。

#### 〈参考図：図書館の所蔵図書内訳〉



希覓図書として、「カルヴァン全集」、「教父全集」、「聖書写本各種」等を所蔵している【参考資料⑩：図書館所蔵の学術雑誌一覧、神学関係の全集類・研究モノグラフ類一覧】。オンラインデータベースや電子ジャーナル等の電子資料については、辞典系データベースは、ジャパンナレッジと、ギリシア語関係のデータベース Thesaurus Linguae Graecae の 2 種類を導入している。これらについては、図書館内の情報端末で閲覧・検索ができる他、キャンパス内のネットワークに接続されたコンピュータからのアクセスも可能である。また従来の紙ベースのものに代えて、論文情報のデータベースとして、The American Theological Library Association (ATLA) Religion Database、Old Testament Abstracts 及び New Testament Abstracts を大学院設置に向けて平成 23 年（2011 年）度より導入している。

図書館協力体制として、千葉県私立大学図書館協会に加盟しており、その加盟図書館、さらには他大学の図書館や公共図書館と連携し、利用者の資料要求に込えている。また、他の神学校図書館とのネットワーク作りのために、本学図書館が中心となって「神学校図書館フォーラム（連絡協議会）」を立ち上げ、複数の神学教育研究機関の所属図書館間の協力関係を推進している。

図書館設備は、図書館面積 1,085.08m<sup>2</sup>、収容可能冊数約 12 万冊、閲覧席数 48 席、である。その他の設備は、グループ学習室 1 部屋、キャレルブース 2 部屋（一部屋 2 名）、アー

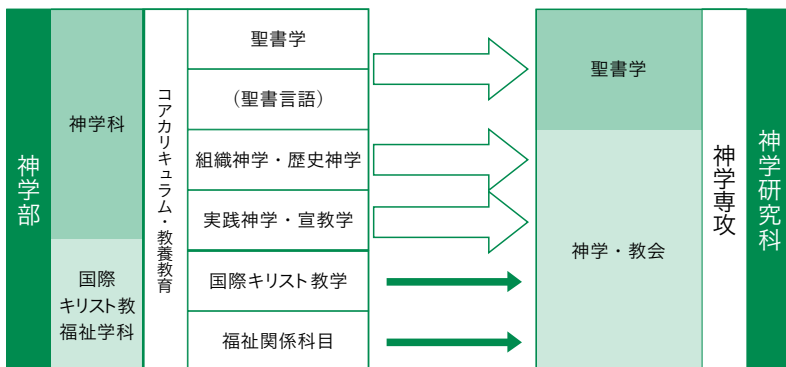
カイン室1部屋、利用者用情報端末13台、がある。また、無線LAN設備を整備している。

図書館予算として、資料費として平成22年度（2010年度）まで450万円を計上していたが、大学院設置のため、特に通常予算に加え資料費として、平成23年度（2011年度）に140万円を計上し、平成24年度（2012年度）以降は各年150万円の計上を予定している。

## VIII 既設の学部との関係

本研究科は、既存の神学部を基礎にする。教育研究上の基盤としては、神学部神学科との接続性を強く意識した教育課程を編成するが、同時に国際キリスト教福祉学科の国際キリスト教学専攻とキリスト教福祉学専攻における教育研究の貢献も反映させる。本研究科の教育研究上の領域としては、「聖書学」領域と「神学・教会」領域を置く。「聖書学」領域は、神学部神学科の専門科目「聖書学」で扱われる旧約聖書学と新約聖書学の分野を継承・発展させる。「神学・教会」領域は、神学部神学科の専門科目「組織神学・歴史神学、実践神学・宣教学」に、国際キリスト教学専攻及びキリスト教福祉学専攻の教育研究の成果を反映させ、これらを統合し、発展・深化させるものとする。

〈参考図：学部と大学院の教育研究領域の関係図〉



また、附属研究機関として設置されている、広義の神学の学際的研究を主要な目的とする「共立基督教研究所」と、神学の実践的応用に焦点を当てた「国際宣教センター」と連携して研究活動を行う。



## IX 入学者選抜の概要

### 1. アドミッションポリシー

本研究科は、高度専門職業人としての教会教職者養成を主たる目的とするため、出願資格として「受洗後キリストへの献身を明確にしたキリスト教信者」であることを求め、また、アドミッションポリシーにおいて、教会教職者としての「召命」（自分が教会教職者になることについての信仰上の使命の確信及び所属教会による同意）を求めている。また、神学研究者・教育者を指す者にも、本大学院の目指す神学教育が神学校などの教育・研究機関をとおして教会に仕えることを目指すものであるため、同様のことを求めるものとする。ただし、教会制度をとらないプロテスタントの諸団体に属する者も、準ずる条件で受け入れるものとする【参考資料⑳：募集要項案】。

#### 〔アドミッションポリシー〕

「教会教職者コース」・「神学研究者・教育者コース」について、以下の項目いずれにも該当する者を受け入れる。

##### ①「教会教職者コース」

- a. 将来、教会教職者（牧師・宣教師・伝道者・教会教育従事者・教会主事等）になるという召命（使命）を持ち、それらの職に就くための高度な専門教育を受けることを欲する者。
- b. プロテスタントのキリスト教会において、受洗後、または幼児洗礼の場合は信仰告白後、3年以上の教会生活を送り、本研究科への入学について教会の推薦を得られる者。
- c. 入学時まで、神学の専門基礎教育（聖書言語を含む）を修了している者。または、本研究科の定める神学に関する知識（聖書言語を含む）を有すると認められる者。

##### ②「神学研究者・教育者コース」

- a. 将来、大学や神学研究・教育機関で働く神学研究者・教育者になるという召命（使命）を持ち、それらの職に就くための高度な専門教育を受けることを欲する者。
- b. プロテスタントのキリスト教会において、受洗後、または幼児洗礼の場合は信仰告白後、3年以上の教会生活を送り、本研究科への入学について教会の推薦を得られる者。ただし、教会制度をとらないプロテスタントの諸団体に属する者は、本条件に準ずる者であること。
- c. 入学時まで、神学の専門基礎教育（聖書言語を含む）を修了している者。または、本研究科の定める神学に関する知識（聖書言語を含む）を有すると認められる者。

## 2. 入試区分

### (1) 学内推薦入試

本学神学部卒業後直ちに大学院への入学を希望する者は、学内推薦入試に出願できる。推薦入試は、12月中旬に、書類審査と面接試験（口述試験を含む）により選考する。出願資格は、①当該年度に大学卒業が見込まれること、②当該年度第2学期までに本学神学部の神学科教会教職専攻の必要単位を修得し、GPAが2.75以上であり、学部長の推薦を得られること、③所属教会の推薦を得られること、④学部4年次に履修する「神学演習」科目における聖書知識テストに合格していること、とする。

### (2) 一般入試

一般入試（2月中旬）は、学内推薦以外の志願者を対象として行う。試験内容は、書類審査、筆記試験（聖書学・神学、聖書原語〔ギリシア語またはヘブライ語〕、英語）、面接試験（口述試験を含む）による総合評価を行う。

### (3) 留学生入試

日本また世界各地での教会教職者としての働きを目指す外国人留学生に対しても積極的に学びの機会を提供するために、留学生を対象とした入試を行う。

出願資格は、「日本の国籍を持たない者で、日本または外国の教育機関で神学の専門基礎教育を受け、本大学院生に求められる知識と能力がある者」である。

留学生入試では、日本語の筆記試験を課す。（日本語能力試験N1レベル合格者は免除）。

## 3. 入学者選抜体制

入学者選抜は、本学入学試験委員会のもとに設置される大学院入試部会（研究科委員長を長とし、専攻主任を含む研究科の専任教員若干名により構成）を中心として、研究科委員会により実施される。入試合否の判定は、研究科委員会で審議の後、学長が入学を決定する。

## 4. 科目等履修生等、正規の学生以外の者の受入人数や方法の計画

本研究科への入学生は、すでに本学神学部または他大学における神学の専門基礎教育を修了していることが原則であるため、大学院の科目等履修生・聴講生についても、原則

として神学部等の卒業生であることが求められる。但し、本学神学部における科目等履修等により必要とされる能力があると研究科委員会が認める者については、その限りではない。受入人数については、授業に支障のない範囲内で、若干名を認める。研究指導・演習科目については、科目等履修・聴講の対象から除外する。受入方法については、各学期の定められた期日までに必要書類を提出させ、研究科委員会の審議を経た上で受講を許可する。

---

## X 管理運営

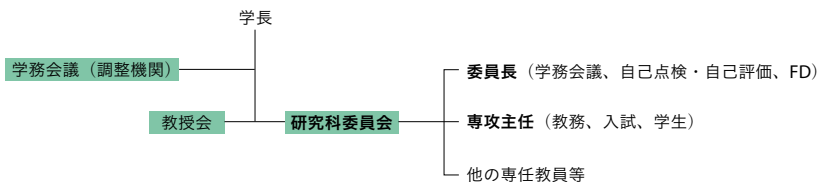
### 1. 教学面における管理運営の体制

本学教授会は、大学院が設置された後も、本学全体に係わる事項を統括するが、研究科独自の事項（研究科に関する入試判定、教員人事、教育課程、学生指導、修了判定その他）を審議するため、研究科委員会を設置する。研究科委員会の構成員は、研究科の授業及び研究指導を担当する専任教員とし、議長は、構成員の中から選出される研究科委員長が務める。また入試・教務・学生を担当する専攻主任を配置する。研究科委員会は、学期中の各月に、教授会とは別に時間を設定して開催する。また研究科委員長は、本研究科と神学部の調整をする「学務会議」（構成員：学長・学部長・学科長・専攻長）に参加する。

研究科委員会の審議事項は以下の通りとする。

- a. 研究科の内容に関する事項
- b. 研究科教員の資格審査に関する事項
- c. 研究科学生の入学、休学、復学、退学、転学及び除籍に関する事項
- d. 研究科学生の試験、研究指導、論文、課程の修了に関する事項
- e. 研究科の教育課程に関する事項
- f. 研究科学生の指導及び厚生に関する事項
- g. 研究科学生の賞罰に関する事項
- h. その他研究科の教育上必要と認められる事項

## 〈参考図：管理運営体制〉



## 2. 運営において一定の独立性を確保し、カリキュラムや人事等で独自の運営ができる仕組み

本研究科の教育課程に関しては、研究科委員会において立案・審議し、「教育研究・カリキュラム委員会」で学部との教育課程との整合性等の点について調整を行った上で、研究科委員会及び教授会の審議を経て、大学院学則において定める。

本研究科において新任の専任教員を採用する際には、研究科委員会からの申し出に基づき、本学教授会に置かれる教員人事委員会で、一般公募を行い、書類審査と公開授業及び面接を実施し、適格性を審査した後、研究科委員会及び教授会（兼担によって本学神学部で教授することをも前提とするため）において審議し、学長が決定する。

また、本学の専任教員の中から大学院の適格者を認定する際には、研究科委員長からの提案に基づき、教員人事委員会が本学「教員選考規程」に基づいて審査し、研究科委員会における議を経て、学長が認定する。

以上のように、本研究科に関すること（特に、教員審査、教育課程、入試、学生指導に関すること）については、研究科委員会において審議を行い、本研究科の独立性を担保する。

---

## XI 自己点検・評価と認証評価

### 1. 実施体制・実施方法

本学では、「自己点検・自己評価委員会規程」に基づき、学長のもとに置かれる自己点検・自己評価委員会が中心となって、大学全体の自己点検・評価を実施している。本研究科に関しては、同委員会に研究科委員長が委員として加わり、同委員会と協力して研究科委員会が不断に大学院独自の自己点検・評価を行う。

点検・評価項目は、原則として本学の認証評価機関である大学基準協会の評価基準に沿っ

て、大学院の使命と目的・教育研究目標・教育研究組織・教育内容と教育方法・教育研究活動・学生の受け入れと学生支援・管理運営体制・教育研究環境整備等とする。その点検・評価項目に基づいて、大学基準協会による認証評価を受けることにしている。なお、各専任教員の活動については、平成 22 年度（2010 年度）よりアカデミック・ポートフォリオを導入し、①教育、②学術研究、③大学運営、④社会貢献の 4 つの活動について自己点検・評価を行った。その結果は、平成 23 年度（2011 年度）春学期中に本学ホームページ上で公開することを予定している。

## 2. 結果の活用・公表

本学では、自己点検・自己評価及び認証評価の結果に基づいて、学部・学科及び各部署における改革・改善を実施している。本研究科に関しても、自己点検・自己評価委員会の主導のもとに、研究科委員会で必要な改革・改善案を策定し、教育研究・運営の質の向上に努める。

併せて本学では、中長期計画に基づき、また自己点検・自己評価及び認証評価の結果を反映させ、各年度の事業計画を立案し、その結果を点検・評価することにより次年度の事業計画に結びつける PDCA サイクルを実施している。事業計画及び事業報告は、教授会及び各部署で作成の後、常任理事会を経て理事会で審議、承認する。その間、年に 2 回監事による監査を受けている。自己点検・自己評価委員会は、事業報告における計画の達成について、自己点検・評価項目との関連でチェックする役割を担っている。本研究科においても、同様の単年度サイクルを構築する。

なお、本研究科も本学部と同様に自己点検・自己評価報告書、認証評価結果、及び単年度の事業計画・事業報告を、本学ホームページ上で公開することを予定している。

---

## XII 情報の公表

学則第 1 条の 3 「本学における教育研究及び宗教活動等の状況について、刊行物への掲載その他広く周知を図ることができる方法によって、積極的に情報を提供するものとする」に基づき、従前より本学ホームページや広報誌を用いて、積極的な情報の公表を行ってきた。本研究科においても、同様の情報の公表を行う。

現在、以下の情報事項については、大学ホームページ（アドレス：<http://www.tci.ac.jp/disclosure/top.html>）において公表している。

- a. 大学の教育研究上の目的
- b. 教育研究上の基本組織、名称等
- c. 教員組織、教員の数（男女別、職別の人数）、各教員が有する学位及び業績（研究業績、教育上の能力に関する事項、職務上の実績、社会貢献、その他）、組織内の役割分担、年齢構成
- d. 入学者に関する受け入れ方針（アドミッションポリシー）、入学者数、収容定員、在学者数、卒業又は修了者数、進路（進学者数、就職者数その他進学及び就職等の状況）
- e. カリキュラムポリシー、授業科目、授業の方法、内容、年間の授業の計画、シラバス
- f. 学修の成果に係る評価及び卒業又は修了の認定に当たっての基準（ディプロマポリシー）、必修・選択・自由科目の別の必要単位修得数、取得可能な学位
- g. 校地・校舎等の施設及び設備その他の学生の教育研究環境、キャンパスの概要、運動施設の概要、課外活動の状況及びそのために用いる施設、休息を行う環境その他の学習環境、主な交通手段等の状況
- h. 学納金（授業料、入学科、寮費、実習費、施設費、教育充実費その他）等大学が徴収する費用に関すること
- i. 大学が行う学生支援の状況（修学支援、キャリア支援、心身の健康に係る支援、留学生支援、障がい者支援）
- j. 学則
- k. 自己点検・自己評価報告書及び認証評価結果
- l. 公的研究資金の管理体制
- m. 学校法人の財務状況（財産目録、貸借対照表、資金・消費収支計算書、監事の監査報告書）
- n. 学校法人の事業計画及び事業報告

なお、以下の情報事項は、大学院設置時に公表する。

- a. **研究科の教育研究上の目的**
- b. **大学院学則、大学院設置申請に係る書類**
- c. **設置認可申請書、設置計画履行状況等報告書**

研究科の教育研究上の目的や各ポリシー等に加え、志願者が入学を考える上で重要な情報は、ホームページ上だけでなく、大学院パンフレットや募集要項においても掲載する。

## XIII 教員の資質の維持向上の方策

### 1. ファカルティ・ディベロップメント(FD)活動

「ファカルティ・ディベロップメント(FD)委員会規程」に基づき、学部長、教務部長、各学科及び各専攻の責任者からなるFD委員会が設置され、教員の資質維持・向上のための組織的なプログラムを実施している。教員の授業改善のためには、講演会、定期的読書会、IT教育やシラバス作成のためのワークショップ、学生による授業評価アンケート、教員による授業相互評価等を行っている。毎年、前年度の「FD活動報告書」を専任・兼任教員全員に配付し、FD活動に関する講演会やワークショップの内容の周知を図り、教育研究活動の改善に役立てるよう配慮している。また専任教員に関しては、ティーチング・ポートフォリオを含むアカデミック・ポートフォリオの作成・提出を年度末に行って、教員の教育研究活動等の自己点検・評価を実施している。さらに教育能力の向上のために、外部の研修会等に教員を派遣している。

本研究科では、FD委員会に研究科委員長が一員として加わり、大学全体の教員の総合的な資質維持・向上の方策の立案と実施に参画し、研究科における授業改善や教授法、及び研究指導についての相互研修等、教員(兼任・兼任教員を含む)の教育研究の資質の維持・向上のための独自のFD活動を実施する。

#### 〔スケジュールと内容〕

- 4月 新任教員研修
- 7月 学生による授業評価アンケート実施(春学期)
- 8月 教育方法・授業改善のための全学研修会(午前)・研究指導ワークショップ(午後)  
前年度「FD活動報告書」の作成・配布
- 10月 シラバス作成のためのワークショップの実施
- 11月 学生による授業評価アンケート実施(秋学期)
- 2月 学生による授業評価アンケート実施(冬学期)
- 適時 アカデミック・ポートフォリオの作成  
教員による授業相互評価の実施  
ICT活用能力に関する研修会  
授業評価アンケートを受けての改善ワークショップ

【参考資料○21：過去3年間のFD実績】

## 2. 研究活動支援

基盤的研究費の他、本大学院設置に備えて、研究活動の活性化を図る目的で本学附属の「共立基督教研究所」に、申請に基づいて研究助成する制度を平成 21 年度（2009 年度）より設けている（個人研究：年 20 万円を 2 課題、共同研究：年 40 万円を 1 課題）。また、科学研究費補助金等の外部資金獲得のための研修やワークショップを継続して実施する。



教会と社会の未来を切り拓くために  
東京基督教大学大学院の理念と概要

---

2012年5月22日発行

発行 学校法人 東京キリスト教学園 東京基督教大学

〒270-1347 千葉県印西市内野 3-301-5-1  
TEL 0476-46-1131 (代表) FAX 0476-46-1405  
URL <http://www.tci.ac.jp>

©Tokyo Christian University  
Printed in Japan